

日本パーソナリティ心理学会

第 33 回大会



会期：2024年10月5日(土)・6日(日)

会場：筑波大学

大会公式サイト：<https://www.jspp33.jp/>

日本パーソナリティ心理学会第33回大会プログラム

■ <u>ごあいさつ</u>	2
■ <u>大会日程</u>	3
■ <u>会場へのアクセス</u>	5
■ <u>会場図</u>	7
■ <u>会場周辺ご飲食のご案内</u>	9
■ <u>大会参加者へのご案内</u>	11
■ <u>発表者へのご案内</u>	16
■ <u>優秀大会発表賞に関する案内</u>	18
■ <u>2024年度ヤングサイコロジストプログラム (YPP2024)</u>	19
■ <u>2024年度ミドルサイコロジストプログラム (MPP2024)</u>	21
■ <u>大会準備委員会企画特別講演・シンポジウム・セミナー等</u>	22
■ <u>経常的研究交流委員会企画シンポジウム・自主シンポジウム</u>	40
■ <u>口頭発表</u>	46
■ <u>ポスター発表 (優秀大会発表賞候補者)</u>	47
■ <u>ポスター発表</u>	48

ごあいさつ

このたび、「日本パーソナリティ心理学会第33回大会」を筑波大学で開催させていただくことになりました。大会日程は、2024年10月5日（土）、6日（日）の2日間となっております。5年ぶりの大学での大会開催ということで行き届かないところもあるかと存じますが、快適な研究交流ができるよう大会準備委員一同努力してまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

筑波大学は、人間、人文社会、理工、情報、生命、医学、図書館情報、体育、芸術といった幅広い学問分野をもつ、他に類をみない総合研究大学です。本大会におきましても地の利を活かしまして、学際性豊かな講演、幅広いテーマを扱ったシンポジウムやセミナー、ポスター発表など、多彩な企画を予定しております。また、15年ぶりに口頭発表を復活させました。大会の開催日程付近には、毎年恒例の若手研究者の企画によるYPP（ヤングサイコロジストプログラム）、大会期間中には、中堅の先生方を対象とするMPP（ミドルサイコロジストプログラム）も予定しております。

さて、会場となります筑波大学の筑波キャンパスは、東京の秋葉原駅よりほんの1時間程度のところにございます。大学からは、「西の富士、東の筑波」と称されるほどに美しい名峰・筑波山を眺めることができます。紅葉で色づく季節には少し早いのですが、広大で緑豊かなキャンパスが皆様をお出迎えしてくれることでしょうか。筑波山には、筑波山温泉、筑波山神社、そして関東一円を眺望できる山頂と、皆様の心身を癒やすスポットが凝縮されています。つくばエクスプレス（TX）のつくば駅より、筑波山エリアまでのシャトルバスも出ておりますので、大会にお越しの際には、是非、足を延ばしてみてくださいませと幸いです。また、科学の街つくばには、JAXA（宇宙航空研究開発機構）をはじめとする研究機関が数多くあります。土・日・祝日は、バスターミナル「つくばセンター」より、つくば市の研究機関等を巡る1日乗降自由の循環バス「つくばサイエンスツアーバス」も運行されておりますので、是非ご利用ください。

それでは、大会が熱気の溢れるものになるように準備してまいりますので、会員の皆様におかれましては、日本パーソナリティ心理学会第33回大会に是非ご参加いただき、活発な研究の交流の機会とされるとともに、清秋の筑波を満喫していただければと存じます。大会準備委員一同、多くの参加者の皆様をお迎えできますことを楽しみにお待ちしております。

2024年3月吉日

日本パーソナリティ心理学会第33回大会準備委員会
委員長 外山 美樹（筑波大学）

大会日程

大会1日目 (10月5日^土)

場所	5階		4階						1階	
	2B 507・508	2B 412	2B 411	2A 410	2A 409	2A 408	2A 407	2A 406	2A 114	2A 113
8:30										
9:00										
9:30			シンポジウム① 「パーソナリティから 『いじめ問題』を 考える」 9:00～10:40	統計セミナー 「仮説をより柔軟な形へ —『差がある』を超えた 仮説の検定—」 9:00～10:20						
10:00										
10:30										
11:00										
11:30			特別講演 「雲と共に生きる」 11:00～12:30							
12:00										
12:30										
13:00										
13:30				ラウンドテーブル 「宇宙心理学の確立に 向けた挑戦—宇宙 開発における心理学の 重要性と課題—」 12:30～14:10 ★						
14:00		経常的研究交流 委員会企画 シンポジウム 「ソーシャルメディア 時代—パーソナリティ 研究から何が言える か—」 13:30～15:30	シンポジウム② 「心理臨床における 介入研究」 13:30～15:10							
14:30										
15:00										
15:30										
16:00	ポスター発表① 15:10～17:10		シンポジウム③ 「非認知能力の 発達と測定」 15:30～17:10	口頭発表 14:30～17:10						
16:30										
17:00										
17:30		総会 17:20～18:10								
18:00										
18:30										

※ 18:30～ 懇親会 会場：大会会館レストランラザ「筑波デミ」（大会会館本館A棟1階）

★ラウンドテーブルは、昼食をとりながら参加していただいても構いません。昼食は各自でご用意ください。

大会 2 日目 (10 月 6 日 [日])

場所	5階		4階						1階	
	2B 507・508	2B 412	2B 411	2A 410	2A 409	2A 408	2A 407	2A 406	2A 114	2A 113
8:30										
9:00										
9:30			シンポジウム④ 「社会のための 動機づけ研究」 9:00～10:40	大会準備委員会・ 機関誌編集委員会 共同企画講習会 「論文掲載への道標 -『パーソナリティ 研究』の場合-」 9:00～11:00						
10:00										
10:30	ポスター発表② 10:20～12:20 ★									
11:00			シンポジウム⑤ 「パーソナリティと 障害支援」 11:00～12:40							
11:30										
12:00										
12:30										
13:00	ポスター発表③ 12:40～14:40		シンポジウム⑥ 「パーソナリティから 『大学スポーツ』に ついて考える」 13:00～14:40	自主シンポ① 「テレビから『血液型性 格肯定番組』を排除し た20年の社会実験- BPOの要望の効果を 検証する-」 13:00～14:40						
13:30										
14:00										
14:30										
15:00	ポスター発表④ 15:00～17:00		シンポジウム⑦ 「近年におけるセルフ・ コンパッション研究の 流れ-多様な介入 方法の開発と今後の 展開-」 15:00～17:00	自主シンポ② 「子どもの認知的・社会 情動的発達をめぐる 遺伝と環境-双生児 研究の挑戦-」 15:00～16:40						
15:30										
16:00										
16:30										
17:00										
17:30										
18:00										

★ポスター発表②のセッションには、優秀大会発表賞候補者の発表が含まれる。

会場へのアクセス

1. 会場

■ 学会大会・総会：筑波大学第2エリア

大学循環バス「筑波大学中央」、高速バスつくば～東京駅線「筑波大学」から徒歩5分
つくばエクスプレス「つくば」駅から徒歩50分

■ 懇親会：大学会館レストランプラザ「筑波デミ」（大学会館本館A棟1階）

筑波大学第2エリア（学会大会・総会会場）から徒歩12分

大学循環バス「大学会館前」、高速バスつくば～東京駅線「大学会館」から徒歩5分
つくばエクスプレス「つくば」駅から徒歩40分

※ 本大会専用の Google マップ がございますので、
以下の URL（または QR コード）からご利用ください。

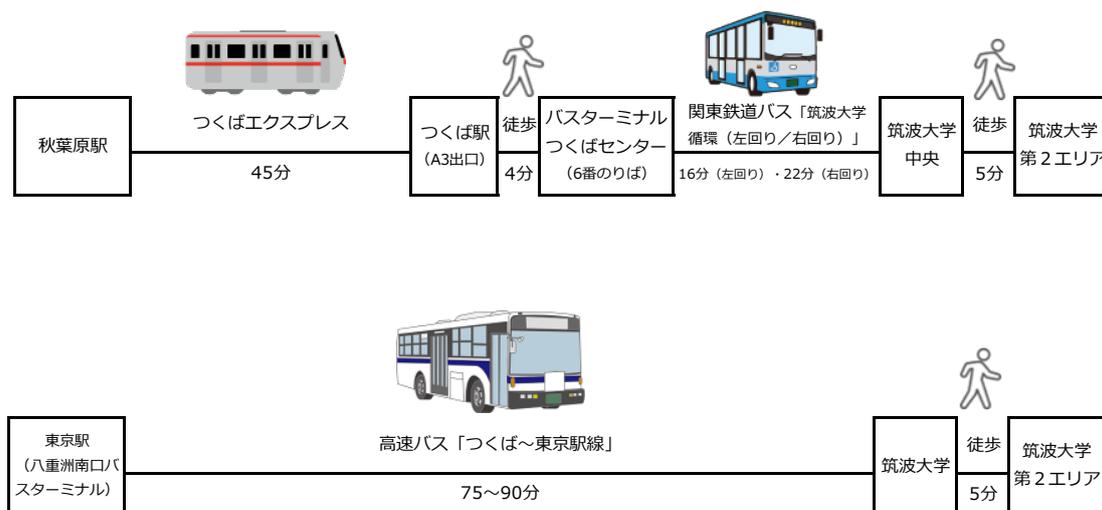
<https://x.gd/qzBJf>

※ 公共交通機関を利用してお越しください。



2. 学会大会・総会会場（筑波大学第2エリア）最寄りのバス停までの道順

経路の詳細は、大会ホームページ（<https://www.jspp33.jp/access.html>）に記載しておりますのでご確認ください。



■ その他の交通手段をご利用の場合

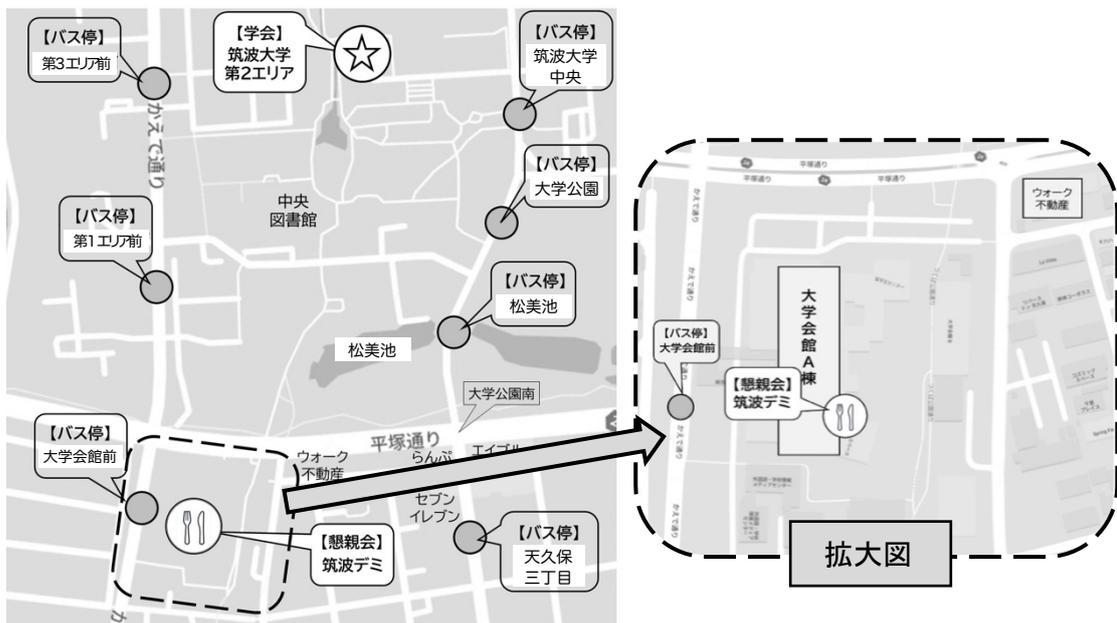
- JR 常磐線「ひたち野うしく」駅、「荒川沖」駅、「土浦」駅のいずれかから、関東鉄道バス・タクシーを利用し、「つくばセンター」へ行くことが可能です。
- 羽田空港、成田空港、水戸駅、京都駅・大阪駅からバスを利用し、「つくばセンター」へ行くことが可能です（バスの本数はきわめて少ないので、ご注意ください）。

3. バス停から学会大会・総会会場（筑波大学第2エリア）までの経路



(注) 地図中の白い三角形 (△) は棟の入り口の自動ドアを示しています。

4. 懇親会会場周辺図

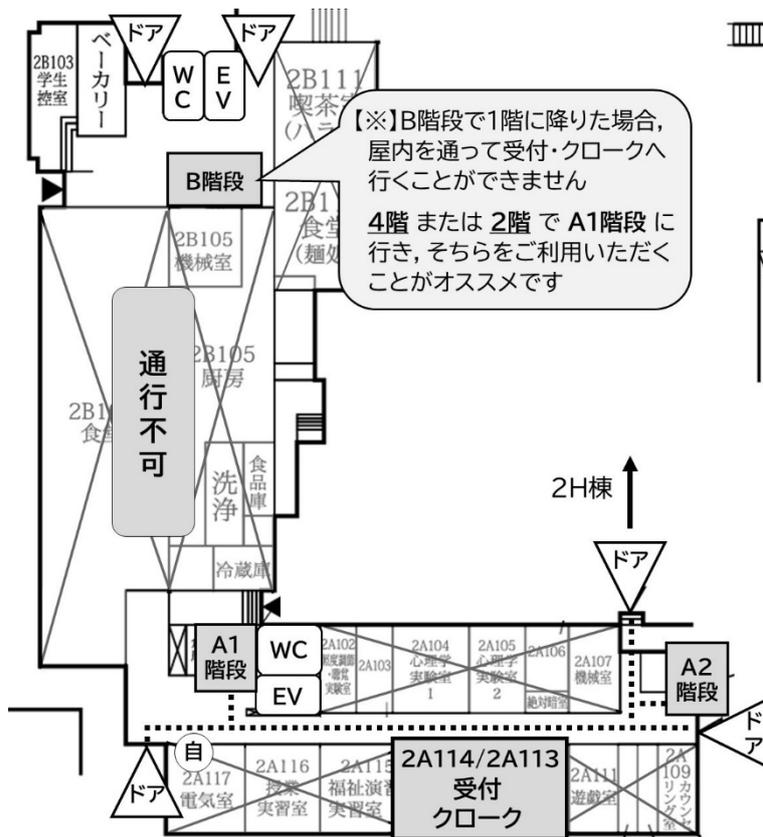


会場図

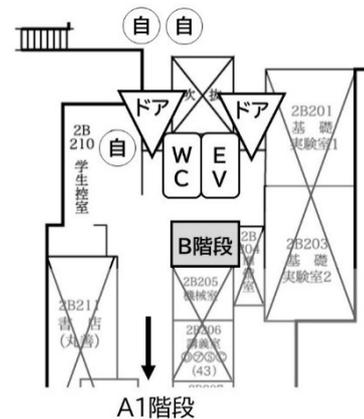
会場一覧

1階	受付・クローク (2A113, 2A114), 自動販売機 (A1 階段付近)
2階	自動販売機 (B 階段付近)
4階	総会 (2B412), シンポジウム・特別講演 (2B411, 2B412), セミナー等・口頭発表・自主シンポジウム (2A410), 休憩室 (2A409), 展示・書籍販売 (2A408), ファミリースペース (2A407), 理事会 (2A406), MPP (2A406)
5階	ポスター発表 (2B507, 2B508)

■ 1階フロアマップ



■ 2階フロアマップ (B階段周辺)



(注)
 点線：主要通路
 EV：エレベーター
 WC：トイレ
 ①：自動販売機

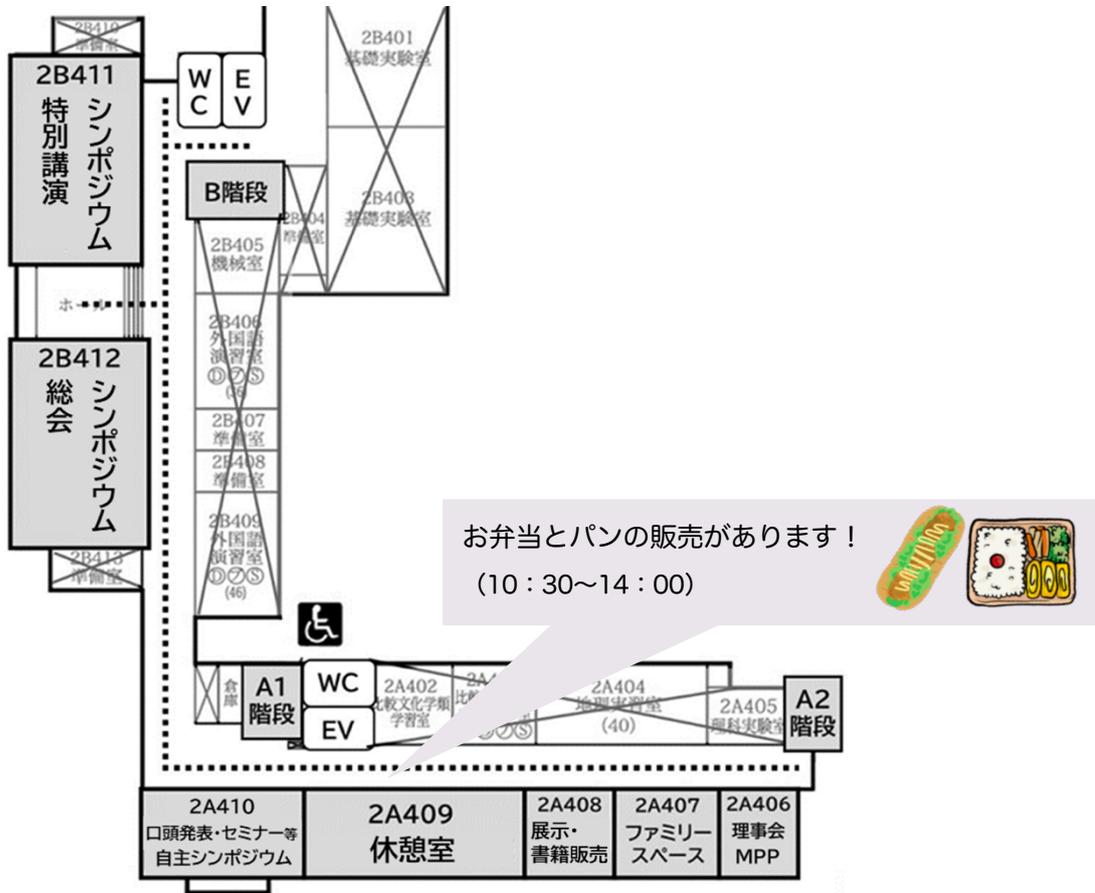
※ 階段について：棟内の3ヶ所の階段の違いは以下の通りです。

【A1 階段・A2 階段】1階から4階の移動用 (4階から5階への移動は不可)

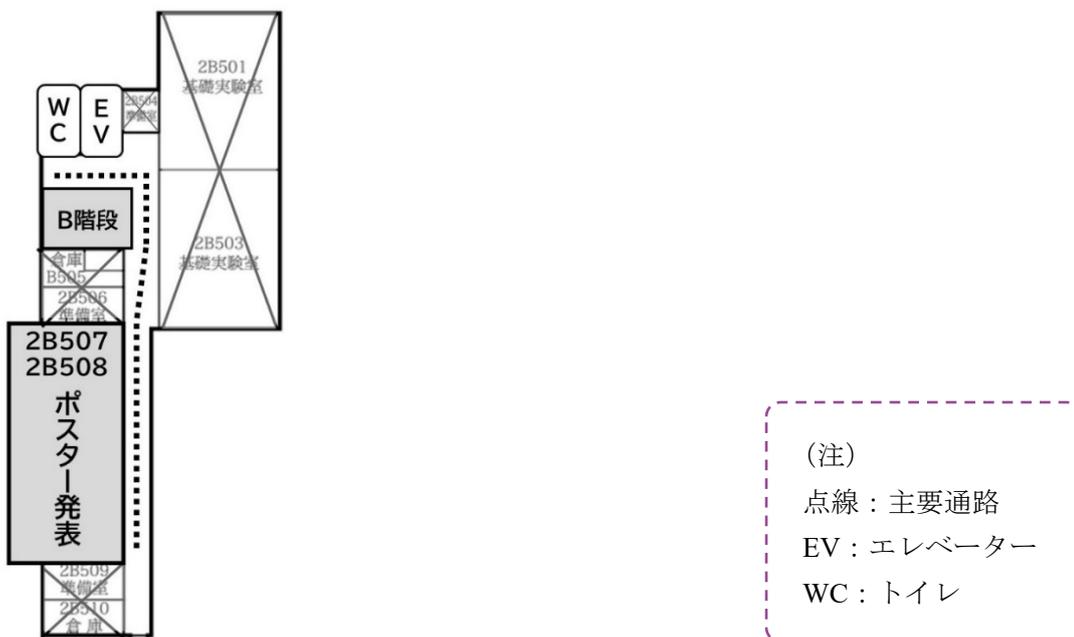
【B 階段】主に4階から5階の移動用 (1階から4階の移動は可能)

階段付近のEVについても同様となります。

■ 4階フロアマップ



■ 5階フロアマップ



会場周辺ご飲食のご案内

- +1 「らんぷ」 筑波大生御用達の大学から一番近い喫茶店（昼のみ、土曜日は定休日）
- +2 「松乃家」 一級品のうなぎが食べられる名店
- +3 「サザ コーヒー」 ケーキと豆にこだわった人気店
- +4 「伝説のすた井屋」 お肉、丼物好きならおすすめの一店



+ ご飯・カフェ系

*下記以外にも大学周辺には多くのラーメン店があります

- ◆1 「東京背脂 銀の豚」 背脂ラーメン、家系、つけ麺など種類豊富
- ◆2 「博多拉麺 一休 本店」 味の染みた博多豚骨ラーメンが人気
- ◆3 「ZEYO」 カレーうどん、行列のできる超人気店
- ◆4 「むじゃき」 まぜそば、油そば、こちらも行列必至のお店



◆ 麺系

*下記以外にも大学周辺には多くの中華料理専門店があります

- ✓1 「百香亭」 大人数での宴会などにもおすすめ
- ✓2 「福軒餃子」 羽付き餃子が有名、ご飯おかわり何度でも無料
- ✓3 「金の馬結」 本格的な麻婆めしや麻婆そばで人気なお店



✓ 中華料理屋

*下記以外にも天久保2丁目周辺には多くの居酒屋があります

- 1 「わかたろう」 大学からも近い隠れ家風の居酒屋
- 2 「あじ彩」 食事の量の多さと質の高さが評判
- 3 「さん吉」 種類豊富な焼き鳥が売りの居酒屋
- 4 「びすとろ椿々」 本格的なイタリアンが楽しめます（日曜日は定休日）



● 居酒屋

*ココス各店舗、ガストの多くのお席ではコンセントがある他、全てのお席でWi-Fiが利用できます

- ★1 「松屋 つくば東大通店」
- ★2 「ココス テクノパーク桜店」
- ★3 「ガストつくばテクノパーク桜店」
- ★4 「すき家 つくば天久保店」 / 「松のや つくば東大通り店」
- ★5 「吉野家 つくば天久保店」
- ★6 「ココス 学園天久保店」



★ 大手チェーン店

- 1 「からあげ専門店 桃ちゃん弁当」
- 2 「おふくろさん弁当」
- 3 「とんかつ弁当かつ大」（日曜日は定休日）
- ♪1 「セブン-イレブン つくば平塚店」
- ♪2 「ローソン つくば天久保3丁目店」
- ♪3 「セブン-イレブン つくば天久保4丁目店」



■ 弁当屋 ♪ コンビニエンスストア

※ 各店の位置は、次のページの地図（印と番号で同定可能です）かGoogleマップでご確認ください。



本大会専用（飲食店版）の Google マップがありますので、以下の URL（または QR コード）からあわせてご確認ください。

※チェックを付けた外したりすることで、麺系のお店、居酒屋など、ご希望の内容に沿ったマップがご覧になれます。

<https://x.gd/gNosW>



【注意事項】

- 掲載情報は 2024/5/1 時点のものになります。ご来店前に各店舗のホームページやグルメサイトなどもご覧ください。
- 大会会場（筑波大学）からマップ上のバス停（天久保三丁目、天久保二丁目、追越宿舎東）に向かう際には、「筑波大学中央」バス停にて、「筑波大学循環（右回り）」にご乗車ください。左回りですと、これらのバス停には停車いたしませんのでご注意ください。

大会参加者へのご案内

1. 会期と会場

会期：2024年10月5日（土）・6日（日）

会場：筑波大学 (<https://www.tsukuba.ac.jp/>)

〒305-8572 茨城県つくば市天王台1-1-1

2. 大会参加に関する諸費用

費目	区分		金額（円）
大会参加費	予約 (9月6日まで)	一般会員	9,000
		院生会員	6,000
		学生会員	1,000
		臨時会員（一般）	11,000
		臨時会員（院生）	8,000
	当日	一般会員	10,000
		院生会員	7,000
		学生会員	1,000
		臨時会員（一般）	12,000
		臨時会員（院生）	9,000
		臨時会員（学生）	1,000
懇親会費	予約期間のみ (9月6日まで)	一般会員 臨時会員（一般）	5,000
		院生会員 学生会員 臨時会員（院生） 臨時会員（学生）	2,000

- ※ 大会参加費は不課税、懇親会費は課税対象（上記金額は税込）となります。
- ※ 本大会では、「非会員であるが参加費を納入した参加者」のことを「臨時会員」と呼称しています。
- ※ 研究生なども含め、学部生ないし大学院生ではない方はすべて一般としての参加になります。
- ※ 大会に参加されない非会員の連名発表者の費用は不要です。
- ※ 大会参加者のご家族等の同伴者（研究者を除く）や高校生以下のお子様は、参加費無料で入場できます。
- ※ 懇親会のみ参加も可能です。ただし、予約参加のみ（9月6日締切）で当日参加はできませんのでご注意ください。

3. 会場設備

■ 受付・クローク

受付とクロークは、大会会場 2A 棟の 1 階 (2A113,2A114) に設置します。受付時間は大会の 1 日目 (10 月 5 日)、2 日目 (10 月 6 日) とも 8:30~17:00 です。参加される皆様には、名札、プレート、大会プログラム、領収書 (当日参加の方のみ) をお渡ししますので、必ず受付にお立ち寄り下さい。

受付の際に、ゲストネットワークアカウントの発行 (希望者のみ) を行います。なお、所属先が eduroam の参加機関に該当する方は、なるべく eduroam 経由でのネットワーク使用をお願いいたします。詳細は下記の「ネットワーク環境」をご参照ください。

また、補助金の交付申請を行うため、受付の際に宿泊先等を含めた参加者情報の入力をお願いしております (詳細は「6.ご協力のお願い」(p.15)をご参照ください)。ご協力をお願いいたします。

クロークの受付時間は、大会の 1 日目 (10 月 5 日) が 8:30~18:30、2 日目 (10 月 6 日) が 8:30~17:30 となります。貴重品は、各自で管理いただきますようお願いいたします。

■ ネットワーク環境

① eduroam

筑波大学は eduroam に参加しております。eduroam に参加している機関^{*1}の構成員であれば、ご自身の eduroam id と password^{*2}で筑波大学の学内 LAN システムからインターネットへアクセスが可能となっております。

※1 参加機関一覧はこちらの URL (<https://eduroam.jp/participants/siteinfo.html>) か右の QR コードからご覧ください。



※2 eduroam を利用するためのアカウントについては、各自の所属機関にお問い合わせください。eduroam の参加機関に所属している参加者の方でアカウントが未発行の方は、本大会に参加される前にアカウントを発行されることをお勧めします。

<設定情報>

大会会場 (筑波大学) において、eduroam を使うための設定は以下の通りです。

SSID	eduroam
セキュリティと暗号化の種類	WPA2 エンタープライズ AES
ID, パスワード	各自が取得した eduroam の ID とパスワード

<利用方法>

eduroam の基本的な利用方法は以下の通りです。

1. SSID 「eduroam」の無線ネットワークに接続してください。
2. ID とパスワードの入力を要求されますので、以下を入力してください。

ID : 各機関で発行される 「ID@レルム」

パスワード : ID に対応するパスワード

OS・デバイス個別の設定については、利用の手引き (https://eduroam.jp/for_users#_href_23 か右の QR コードからアクセス可能) をご参照ください。



② ゲストネットワークアカウント

eduroam に参加していない機関の構成員は、筑波大学のアクセスポイントを利用していただくためのゲストネットワークアカウントを発行します。会場 1 階の受付 (2A114) にお立ち寄りください。

■ 休憩室

大会会場 2A 棟 4 階の 2A409 室が休憩室としてご利用いただけます。会場内（1 階と 2 階）に飲料の自動販売機がございます。また、大会 1 日目、2 日目ともに（10：30～14：00）、休憩室近くで、お弁当、パンを販売する予定ですので、是非ともご利用ください。

■ ファミリースペース

大会会場 2A 棟 4 階の 2A407 室がファミリースペースとしてご利用いただけます。ここでは、自習・読書・ゲームなど自由に使える机と椅子をご用意し、スタッフが 1 名常駐します。

下記の注意点をよくお読みいただき、ご利用ください。

- ・乳幼児から高校生まで幅広く利用可能ですが、9 歳以下のお子さまは、保護者の同伴が常時必要です。
- ・お子さまだけのご利用は、10 歳以上とします。その際も、必ず保護者が受付を行ってください。
- ・飲食物の提供はありませんので、ご家庭でご用意ください。ご家族での昼食などにもご利用いただけます。
- ・スタッフは、入退室の管理のみ行います。ご利用中の事故およびその他のトラブルは責任を負いません。なお、授乳室は別の建物にあります。ご利用を希望される方は、事前に大会事務局までご連絡ください。

■ 展示・書籍の販売

大会会場 2A 棟 4 階の 2A408 室に展示・書籍販売スペースを設置します。出展企業は以下の通りです。

【株式会社北大路書房】

【株式会社誠信書房】

【アイブリッジ株式会社】

【福村出版株式会社】

■ 会期中の昼食

本大会では昼食の時間を設けておりませんので、空き時間に適宜昼食をおとりくださいますようお願いいたします。大会 1 日目、2 日目ともに（10：30～14：00）、休憩室近くで、お弁当、パンを販売する予定ですので、是非ともご利用ください。また、会場周辺には、飲食店やコンビニエンス・ストアがございます。詳しくは「会場周辺ご飲食のご案内」（p.9）をご覧ください。

■ 駐車場

大会参加者向けの駐車場は用意しておりません。会場へのアクセスは、できるだけ公共交通機関をご利用ください。

■ メディアへの発信

大会期間中、大会公式 X（旧 twitter）で大会の情報を発信しますのでご参照ください。大会期間中に発表の録音および録画・撮影・中継・実況等をする場合は、たとえ用途が個人用であったとしても、必ず発表者の許可を取るようお願いいたします。また、SNS などの公共性の高いメディアで発表内容を情報発信する場合は、発表者や他の参加者の気分を害することがないようお願いいたします。

4. 大会関連行事のご案内

■ 総会

大会1日目の10月5日(土)の発表プログラム終了後、17:20より対面(大会会場2B棟4階の2B412室)とWeb会議システムのハイブリッドで開催します。

■ 懇親会

大会1日目の10月5日(土)18:30より、大会会館レストランプラザ「筑波デミ」(大会会場より徒歩12分)にて開催いたします。懇親会へ参加できるのは、事前(早期・予約期間)に予約された方のみです。

■ 各賞の発表

今年度の「詫摩武俊賞(優秀論文賞)」・「奨励論文賞」の授賞式を総会で行います。今大会の懇親会には、昨年度の優秀大会発表賞の受賞者をご招待します。今大会の優秀大会発表賞の受賞者の発表は、大会終了後にメールニュース等で行います。

■ 理事会

大会1日目の10月5日(土)の12:30~13:30に、大会会場2A棟4階の2A406室で開催します。理事・監事の皆様はご参集ください。

■ ヤングサイコロジストプログラム (YPP2024)

大会前日(10月4日(金))の14:30~17:45に、筑波大学(本大会と同一会場)で行います。詳細は本大会プログラムの19~20ページをご覧ください。また、学会HP内の2024年度ヤングサイコロジストプログラム(YPP2024)に関する説明もあわせてご覧ください(https://jspp.gr.jp/sympo/wk_r6/)。

■ ミドルサイコロジストプログラム (MPP2024)

大会2日目の10月6日(日)の11:30~12:30に、大会会場2A棟4階の2A406室で開催します。詳細は本大会プログラムの21ページをご覧ください。

5. 各種更新ポイントについて

■ 臨床心理士

本大会、および大会のプログラムは臨床心理士の資格更新ポイントの対象となっています。具体的には、「日本臨床心理士資格認定協会：臨床心理士資格更新制度」の「③本協会が認める関連学会での諸活動への参加」に該当します。

■ 学校心理士

本大会、および大会のプログラムは学校心理士の資格更新ポイントの対象となっております。具体的には、

「一般社団法人学校心理士認定運営機構：資格取得・更新」の種別記号表と提出書類一覧 (https://www.gakkoushinrishi.jp/wp-content/uploads/kigohyo_shorui_list.pdf) 中の「⑤種別記号F,G,H,I」に該当します。詳しくは、学校心理士認定運営機構・日本学校心理士会の情報をご確認ください。
(<https://www.gakkoushinrishi.jp/qualification/qualification/>)

6. ご協力をお願い

本大会は、(一社) つくば観光コンベンション協会及びつくば市の協力を得て開催します。補助金の交付申請を行うため、一般社団法人つくば観光コンベンション協会に参加者名簿(氏名, 所属先, 国籍, 宿泊されました方は宿泊場所)を提出させていただきます。必要情報の記入および提出にご理解ご協力くださいますようお願いいたします。

発表者へのご案内

1. 一般研究発表

■ ポスター発表

本大会のポスター発表は、4セッションです。すべて対面で行います。各セッションのスケジュールは、「大会日程」(p.3~4)をご確認ください。

○ 掲示：

- ・発表者は、セッションの開始時刻までに自分の発表番号のパネルにポスターを掲示してください。パネルへの貼り付けには画鋲を利用していただきます。画鋲は大会準備委員会で用意します。
- ・ポスター会場のパネルは縦210cm、横90cmです。パネルに収まるのであれば、ポスターのサイズは問いません。ただし、ポスターは、発表タイトル、発表者の氏名と所属、発表内容の情報を含めて作成してください。
- ・ポスターの最上部に大きく、発表タイトル、発表者の氏名、所属を表記するようにしてください。本文はポスターから離れた位置でも見える大きさにしてください（フォントサイズの指定はありません）。
- ・資料等を配布する場合には、各自でご準備ください。コピー機等の用意はありません。
- ・セッション終了時刻になったら、速やかにポスターを撤去してください。撤去されないまま放置されたポスターは大会準備委員会で処分します。

○ 発表成立要件

- ・発表受付は不要です。ポスターを掲示し、在席責任時間中ポスターの前で発表し、質疑に応じることで正式発表として認められます。

○ 在席責任時間

- ・在席責任時間は、奇数番号はセッション前半の60分、偶数番号はセッション後半の60分です。それぞれの在席責任時間中に、発表者の在席を確認します。なお、在席責任時間帯以外にも、できるだけ在席することが望まれます。

○ その他

- ・責任発表者がやむを得ない事情により欠席する場合、連名発表者が発表を代行することができます。発表取り消しについては、事前に大会準備委員会(33jspp2024@gmail.com)までご連絡ください。

■ 口頭発表

本大会の口頭発表は、1セッションです。スケジュールは、「大会日程」(p.3)をご確認ください。

○ 発表準備

- ・会場に発表資料投影用の機材(プロジェクター、スクリーン)を用意します。パソコンは大会準備委員会で用意していますが、発表者ご自身のPCを持ち込んでいただいてもかまいません。映像出力にはHDMIがご利用いただけます。
- ・発表者は、セッション開始の10分前までに会場にお越しいただき、あらかじめパソコンの接続確認など、事前準備をお願いします。

○ 発表成立の要件

・当日の発表と質疑応答に参加することで、公式の発表として認められます。当日の発表と質疑応答は、原則として責任発表者が行ってください。

○ 発表時間

・1人あたりの発表時間が25分（発表15分・質疑応答10分）です。時間厳守へのご協力をお願いします。発表中は司会がベルで合図します。回数とその意味内容は以下の通りです。

1回目：12分経過　2回目：15分経過（発表終了）　3回目：25分経過（質疑応答終了）

○ 配布資料

・資料等を配布する場合には、各自でご準備ください。コピー機等の用意はありません。

○ その他

・責任発表者がやむを得ない事情により欠席する場合、連名発表者が発表を代行することができます。発表取り消しについては、事前に大会準備委員会（33jspp2024@gmail.com）までご連絡ください。

2. 大会準備委員会企画・各種委員会企画・自主企画

・会場に発表資料投影用の機材（プロジェクター、スクリーン）を用意します。パソコンは大会準備委員会で用意していますが、発表者ご自身のPCを持ち込んでいただいてもかまいません。映像出力にはHDMIをご利用いただけます。

・発表者は、各セッション開始の10分前までに会場にお越しいただき、あらかじめファイルをパソコンに入れておくなどの事前準備をお願いします。

・自主企画シンポジウムの時間は100分に設定されています。参加者による質疑応答の時間を確保するようにご配慮ください。

優秀大会発表賞に関する案内

■ 優秀大会発表賞について

本大会では、優れた発表（ポスター、口頭）に対して優秀大会発表賞が授与されます。

抄録原稿を対象とした一次審査と、当日の発表を対象とした二次審査による総合的な審査で受賞者を決定します。

ポスター発表、口頭発表ともに、優秀大会発表賞の対象になります。

■ 一次審査の結果

一次審査通過者については、本大会プログラムの47ページをご覧ください。

なお、一次審査の結果、今大会では、優秀大会発表賞候補者（一次審査通過者）はすべてポスター発表形式となりました。

■ 二次審査について

二次審査は、大会参加者による投票で行います。

優秀大会発表賞候補者の発表と審査は、下記の通り行います。

日時	大会2日目の10月6日（日）10：20～12：20
場所	2B507（この部屋では、優秀大会発表賞候補者の発表と投票のみ行います。）
投票基準	研究内容の質（内容の新規性、データの貴重さ、問題提起の面白さなど）、ポスターの工夫と発表の分かりやすさ、質疑応答の明確さなどを踏まえた総合評価
投票方法	当日、審査会場（2B507）にて、投票フォームのQRコードを提示します。 投票フォームから、特に優れた発表を1つご投票ください。 ※PC・スマートフォンをご利用でない方には、投票用紙をご用意しています。

※ 大会参加者のみなさまへお願い

優秀大会発表賞候補者の発表時間帯にご来場・ご投票いただけますよう、ご協力をお願いいたします。

■ 受賞者の発表について

大会終了後にメールニュース等で行います。

2024 年度ヤングサイコジストプログラム (YPP2024)

日本パーソナリティ心理学会では毎年、若手研究者同士の議論や交流、情報交換の場として、年次大会の時期にヤングサイコジストプログラム (YPP) を開催しています。YPP2024 のテーマは「研究仲間を見つけようー将来につながるネットワーキングー」です。そのため多様な方との交流を目的としたプログラムを予定しています。YPP での交流が当日限りではなく、将来も続いていくような関係の第一歩になることを目指しています。ぜひ奮ってご参加ください。

1. 開催日時：2024 年 10 月 4 日 (金) 14:30 ~ 17:45 (予定)
 - ※パーソナリティ心理学会年次大会 (2024 年 10 月 5 日 (土)・6 日 (日)) の前日です。
 - ※受付は 14:00 ~ 14:30 で行います。
 - ※途中参加・途中退出をご希望の方は事前に下記のメールアドレスまでご連絡いただけますと幸いです。
 - ※プログラム終了後には、会場周辺で懇親会を予定しております (18:30 から 2 時間程度)。参加費は 2500 円~4000 円程度の予定です。是非ご参加ください。
2. 開催場所：筑波大学
3. 参加資格：学部・大学院に在籍中の学生 or 学部卒業・大学院修了/退学後 5 年以内の方
 - ※パーソナリティ心理学会員以外の方も歓迎します。
4. 参加費：無料
5. 申込方法：下記の URL にアクセスし、応募フォームに従って申込みをお願いいたします。
応募フォーム：<https://forms.gle/MoAXsTst1PQr81dB6>
※詳細は、日本パーソナリティ心理学会 WEB サイトの「2024 年度ヤングサイコジストプログラム (YPP2024)」よりご確認ください (https://jspp.gr.jp/sympo/wk_r6/)。
6. 申込締切日：2024 年 8 月 31 日 (土)
7. 企画内容：
以下の 2 つの企画を 1 セットとして、異なる班で 2 セット行います。1 回目の班は近いキャリア、2 回目の班は異なるキャリアの人々で、それぞれ少人数で構成されます。

企画 1：若手研究者の多様な実情共有

少人数グループに分かれ、それぞれの研究生活の過ごし方や研究の進め方、研究遂行における躓きといった経験や実情を共有してもらい、アイスブレイクおよび交流をしていただきます。1 回目の班で実情共有を行う前には、例として企画委員が実情共有をするので、話題に困ることもありません。

企画2： 関心キーワード紹介

「実情共有」で打ち解けたグループそのままに「関心キーワード紹介」を行います。自身の関心のある研究上のキーワード (e.g., テーマ, 理論, 構成概念) や, 関心を持った理由を紹介し, 交流する企画です。持ち時間は1人8分 (予定) で, 分野の離れた人にも伝わるように説明してください。8分以内での時間配分は自由です。運営が用意したテンプレート (A4一枚) を基に発表資料を事前にご準備ください。YPP2024では, 研究に関連した交流の貴重な機会として, ご参加いただく皆様にご発表いただく予定です。

※何らかの理由で発表を希望されない場合は, 下記のメールアドレスまでご連絡ください。

8. Discord の使用に関して：

YPP2024 当日まで, および終了後の交流のために, チャットツール **Discord** に招待します。ぜひ積極的な交流にご活用ください。

※YPP2024 終了後, 約1か月でサーバーは閉じます。

連絡先：jspp.wk@gmail.com

企画：上田 皐介 (名古屋大学・企画担当代表), 真鍋 一生 (名古屋大学), 杉山 陽香 (中京大学), 中荒江 大河 (追手門学院大学)

主催：日本パーソナリティ心理学会広報委員会

2024 年度ミドルサイコロジストプログラム (MPP2024)

MPP は、同世代の研究者と共に、中堅教員・研究者が抱えるさまざまな課題を共有し、議論を通じた交流を行う場として、2016 年度より開催されております。大学教育に携わる中堅層の先生方を念頭においた企画ではございますが、今年度は、大学での教育に興味・関心がある方なら（属性や勤務先や会員／非会員などに関わらず）どなたでもご参加いただけます。今年度は、大会 2 日目に、下記の要領で開催します。

1. 開催日時： 2024 年 10 月 6 日（日）11:30～12:30（開始 15 分前より開場予定）
2. 開催場所： 筑波大学 2A406
3. 参加費： 無料（茶菓子などをご用意しております。）
4. テーマ： これくらいでいいんじゃない？ —心理学の授業の進め方—
5. 企画内容：

公認心理師課程の各心理学科目の標準シラバスは、型にはまっていて糊代が少なく、教員（あるいは大学側）は、心理学科目で、独自性や特色をアピールすることが難しくなっています。また授業形態では、コロナ過を経て、本格的に対面授業が再開されたものの、学生の合理的配慮等で、オンライン授業と対面授業の混在を求められる場面も出てきました。こういった対応のノウハウについては、大学あるいは教員で異なることが予想されます。公認心理師科目の是非や大学の対応の不満はさておき、今回の MPP 企画は、今ある環境の下で「教員が気負わずに楽しく授業をする。」をモットーに、皆さんが行っている授業の工夫やノウハウについて共有することを目的とした企画を計画しています。

企画：西川 一二（大阪商業大学）、唐 音啓（共愛学園前橋国際大学）、山下 倫実（十文字学園女子大学）

主催：日本パーソナリティ心理学会経常的研究交流委員会

大会準備委員会企画特別講演

10月5日(土) 11:00~12:30
筑波大学 2B411

雲と共に生きる

企画者：日本パーソナリティ心理学会第33回大会準備委員会

司会者：外山 美樹（筑波大学）

講演者：荒木 健太郎（気象庁気象研究所主任研究官）

【講演趣旨】

私たち人間は地球の大気圏内で生活しており、その生活は天気には大きな影響を受けている。天気を左右するのが雲であり、私たちが災害から命を守り、より豊かな生活を送るためには雲を理解し、上手な距離感で付き合うことが有効である。講演者はこれまで、防災・減災を目的に気象学・雲科学の科学リテラシーを育む取り組みをしていくなかで、雲のパーソナリティに注目して擬人化などを行い、雲の物理の正確性を保ちながらも定性的にわかりやすい解説方法などを検討してきた。今回の講演では、基本的な雲のしくみから、雲の個性（分類）、雲のパーソナリティの考え方、雲が人間の心に及ぼす影響、雲の心の読み方などを中心に紹介する。また、災害をもたらす雲の実態解明と監視・予測技術高度化のために、講演者が関わってきた大気・雲の観測・予測研究についても紹介する予定である。

【講演者紹介】

雲研究者・気象庁気象研究所主任研究官。慶應義塾大学経済学部を経て気象庁気象大学校卒業。三重大学大学院生物資源学研究所博士課程修了（博士（学術））。茨城県出身。地方気象台で予報・観測業務に従事したあと、現職に至る。専門は雲科学・気象学。防災・減災のために、気象災害をもたらす雲の仕組みの研究に取り組んでいる。2017年度日本雪氷学会「関東・中部・西日本支部」論文賞を受賞。好きな雲は積乱雲。

【主な著作物】

・ Araki, K., H. Seko, H. Ishimoto, T. Tajiri, K. Yoshimoto, M. Matsumoto, T. Takeda, Y. Kawano, K. Suzuki, and K. Nakayama, 2023: Development of ground-based microwave radiometer network and monitoring system using 1-dimensional variational technique. *CAS/JSC WGNE Research*

Activities in Earth System Modelling, 53, 1.03-1.04.

映画『天気の子』（新海誠監督）、ドラマ『ブルーモーメント』気象監修。『情熱大陸』、『ドラえもん』など出演多数。著書に『すごすぎる天気の本』、『もっとすごすぎる天気の本』、『雲の超本』、『読み終えた瞬間、空が美しく見える気象のはなし』、『世界でいちばん素敵な雲の教室』、『雲を愛する技術』、『雲の中では何が起きているのか』などがある。

※そのほかの研究業績に関しては、荒木先生の [researchmap](https://researchmap.jp/kentaro.araki) (<https://researchmap.jp/kentaro.araki>) をご参照ください。



(2024年4月発売)

大会準備委員会企画シンポジウム 1

10月5日(土) 9:00~10:40

筑波大学 2B411

パーソナリティから「いじめ問題」を考える

企画者：日本パーソナリティ心理学会第33回大会準備委員会

司会者：外山 美樹（筑波大学）

話題提供者：渡邊 健蔵（筑波大学大学院）、水野 君平（北海道教育大学旭川校）、下司 忠大（立正大学）

指定討論者：北村 英哉（東洋大学）

1. 企画趣旨

文部科学省（2023）の「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」では、いじめの認知件数および1000人あたりのいじめ認知件数が小・中学校、高等学校で、過去最多の件数であったことが報告されている。また、いじめの重大事態件数も昨年度の調査で、過去最多を記録している。2013年に、「いじめ防止対策推進法」が施行されてから10年余りが経過しているものの、いじめに関する問題は、検討の余地があることがうかがえる。

そこで、本シンポジウムでは、「いじめ問題」について、パーソナリティや関連する概念の個人差の観点を踏まえて検討した研究を紹介する。具体的には、「いじめ問題」と関連する要因として、「攻撃行動の機能・形態」、「スクールカースト」、「Dark Triad」の観点を踏まえた知見を紹介する。そのうえで、「いじめ問題」の未然防止や早期発見・対応に資する知見の応用可能性について考えていく。

2. 話題提供者の要旨

2.1. 「道徳不活性化と攻撃行動の形態及び機能との関連」

渡邊 健蔵（筑波大学大学院）

近年、いじめを含む攻撃行動の抑制のため、Banduraにより提唱された道徳不活性化に着目がなされている（Bandura, 2002）。道徳不活性化とは、4つの側面及び8つの一連のメカニズムが相互に機能することにより自己調整過程を不活性化し、攻撃行動の実行を可能にするメカニズムであり、いじめ及び攻撃行動と正の関連が確認されている（Bandura, 2002; Bandura et al., 1996; Wang et al., 2017）。

一方で、攻撃行動は、これまでその形態もしくは機能

に着目がなされ、検討が行われてきた。具体的には、攻撃行動の形態は、身体的攻撃及び言語的攻撃から成る外顕的攻撃、友人関係の操作等により他者を攻撃する関係性攻撃から構成される（Crick & Grotpeter, 1995; Grotpeter & Crick, 1996）。また、攻撃行動の機能は、怒りを伴う脅威への防衛的な反応である反応的攻撃、攻撃行動を自身の欲する目的のために使用する能動的攻撃から構成される（Dodge & Coie, 1987）。加えて、近年では、攻撃行動の詳細な検討を行うため、攻撃行動の機能及び形態を組み合わせたPeer Conflict Scaleが開発されている（Marsee et al., 2011）。また、日本では、渡邊・濱口（2023）により、青年期を対象に能動的攻撃、反応的関係性攻撃、反応的外顕的攻撃の3因子から構成される日本語版Peer Conflict Scaleが開発され、攻撃行動の形態もしくは機能との相関が確認されている。

しかし、道徳不活性化と攻撃行動との関連では、形態もしくは機能との関連のみの検討に限定されており、道徳不活性化と攻撃行動の形態及び機能を組み合わせた検討はほとんど行われていない。

今回のシンポジウムでは、渡邊及び濱口が、高校生1000名以上を対象に道徳不活性化と攻撃行動の形態及び機能との関連を検討した研究について紹介する。また、渡邊・濱口（2023）の日本語版Peer Conflict Scaleの開発に関する研究を併せて紹介し、いじめを検討する上で攻撃行動の形態及び機能の観点から捉える必要性を考える。

引用文献

Bandura, A., Barbaranelli, C., Caprara, G. V., & Pastorelli, C. (1996). Mechanisms of moral disengagement in the exercise of moral agency. *Journal of Personality and Social Psychology, 71*, 364-374.

Marsee, M. A., Barry, C. T., Childs, K. K., Frick, P. J., Kimonis, E. R., Muñoz, L. C., Aucoin, K. J., Fassnacht, G. M., Kunimatsu, M. M., & Lau, K. S. L. (2011). Assessing the forms and functions of aggression using self-report: Factor structure and invariance of the peer conflict scale in youths. *Psychological Assessment, 23*, 792-804.

2.2. 「友人グループ間の地位といじめや攻撃行動」

水野 君平 (北海道教育大学旭川校)

国際的な研究の潮流では、いじめは攻撃行動のうち、意図的で、反復性があり、力関係が背景にあるものとして捉えられており (Olweus, 2013), 日本の法令上の定義とは異なる部分がある。すなわち、いじめか否かは被害者視点に立つというのが日本の捉え方であり、力関係は特に考慮されることは少ない。しかし、力関係(子どもの中での社会的地位)がいじめと関連するという事は「認識された人気 (perceived popularity)」を指標とした研究からは多く蓄積されている。これらの研究を概観すると、人気がある子どもほど、攻撃的であり、いじめ加害行為も行いやすいことが示されている。その理由として、時にはいじめ加害にもなる攻撃行動は自己の地位を維持・向上させる機能があるためとされている(Cillessen & Mayeux, 2004)。ただし、認識された人気の研究は様々な事情があり日本では管見の限り見ない。

しかし、日本では「スクールカースト」と呼ばれるような友人同士のインフォーマルなグループの間での地位関係がいじめと関連するのではないかと指摘されている。話題提供者は複数の調査から「スクールカースト」といじめの関係を検討してきた。本シンポジウムではこれらの成果を概観するとともに、新たなデータが間に合えばそれも交えて「スクールカースト」の観点からいじめについて報告したい。そして、指定討論やフロアと共にいじめの未然防止や早期の対応等について考えていきたい。

引用文献

Cillessen, A.H.N., & Mayeux, L. (2004). From censure to reinforcement: Developmental changes in the association between aggression and social status. *Child Development, 75*, 147-163.

Olweus, D. (2013). School Bullying: Development and Some Important Challenges. *Annual Review of Clinical Psychology, 9*, 751-780.

2.3. 「Dark Triad の観点からのいじめ行動の予測・対処」

下司 忠大 (立正大学)

Dark Triad とは、マキャベリアニズム、自己愛傾向、サイコパシー傾向の3つの冷淡なパーソナリティ次元の総称である。Dark Triad のような次元がどの年代から現れるのかについては議論の余地があるが、近年、青年期における Dark Triad の構造や特徴が明らかになされてきた。

青年期における Dark Triad の行動傾向の中でも、いじめ行動との正の関連はしばしば示されてきた (e.g., Davis, 2022)。Dark Triad といじめ行動との正の関連は、教育場面においていじめを予測するうえで生徒の Dark Triad を測定し、把握する必要性を訴求するものである。

その一方で、青年期における Dark Triad といじめとの正の関連性は確かな予測を可能にするほど強いものではない (e.g., Davis et al., 2022; $r = .05-.40$)。理論的には、Dark Triad と攻撃行動や不正行為との正の関連は状況依存的なものであることが示唆されるが、それはいじめ行動との正の関連においても同様である可能性がある。

そこで本発表では、以上の領野の知見を敷衍した上で Dark Triad といじめ行動との正の関連を強める状況設定を考察し、議論する。そしてそれを踏まえて、Dark Triad におけるいじめ行動の予測・対処について議論したい。

引用文献

Davis, A. C., Farrell, A. H., Brittain, H., Krygsman, A., Arnocky, S., & Vaillancourt, T. (2022). The dark triad and bullying in adolescence: A three-wave random intercept cross-lagged panel analysis. *Journal of Research in Personality, 96*, 104178.

大会準備委員会企画シンポジウム 2

10月5日(土) 13:30~15:10

筑波大学 2B411

心理臨床における介入研究

企画者：日本パーソナリティ心理学会第33回大会準備委員会

司会者：三和 秀平（信州大学）

話題提供者：向井 秀文（信州大学）、今福 理博（武蔵野大学）、樫原 潤（東洋大学）

指定討論者：松田 英子（東洋大学）

1. 企画趣旨

心理臨床の実践において、エビデンスは重要である。American Psychological Association Presidential Task Force on Evidence-Based Practice (2006) では Evidence-Based Practice について“クライアントの状況を踏まえ、最善の利用可能な研究成果を臨床スキルと統合すること”としており、有益な知見を提供するために、心理臨床の分野では様々な実証研究が行われてきた。

実践されている介入研究をみても、介入の目的や方法、効果検証の仕方も多様である。例えば、質問紙で効果測定をしたり、行動の変容をアウトカムとして捉えたりするものなどもある。また、参加者を募って介入を行う研究や学校や医療施設等のフィールドに研究者が入って介入をする研究もある。さらに、近年では対面だけでなくオンラインでの介入実践も行われるようになってきている。介入研究は基礎的な知見を社会に還元するために重要であるが、実際に行うにあたっては研究計画の立て方、調査協力者の募集、倫理的配慮、効果検証の方法、結果の解釈などにおいて多くの困難が生じる。そのため、実際に介入研究を行うにあたってはハードルが高いと感じている者も多いだろう。

そこで、本シンポジウムでは心理臨床の分野において介入を伴う多様な研究実践をしている研究者を招き、その取り組みを紹介する。そして、介入研究を行う際に生じる困難やその対応についてお話いただく。その上で、今後の心理臨床における介入研究の展望について考える。

引用文献

American Psychological Association, Presidential Task Force on Evidence-Based Practice. (2006). *Evidence-based practice in psychology*. *American Psychologist*, 61(4), 271–285.

2. 話題提供者の要旨

2.1. 「考え続ける義務感の低減をターゲットとしたメタ認知療法」

向井 秀文（信州大学）

不安や抑うつといった複数の心理的症状の悪化プロセスを検討した研究では、反復思考の高さが共通要因の一つになることを指摘している (Ehring & Watkins, 2008)。さらに、近年では、自身の思考プロセスのコントロールに関与するメタ認知的信念が、反復思考の悪化を促進することが明らかにされている (Wells, 2013)。これらの知見を踏まえると、複数の心理的症状の低減にあたっては、特定のメタ認知的信念をターゲットとした介入が有用であることがうかがえる。

そこで、今回は、「考え続ける義務感」といったメタ認知的信念の低減をターゲットとした介入研究(向井・杉浦, 2022)を紹介する。介入プログラムの作成にあたっては、既存のメタ認知療法のプログラムを参考に作成した。そして、介入にあたっては、心理的苦痛が強い大学生34名を対象として、介入群と統制群に振り分けて、効果検証を行った。その結果、統制群においては、不安症状や抑うつ症状の低下は認められなかったが、介入群において、大きな低下が認められた。

本発表では、上述した介入研究の流れを紹介するとともに、実施に際して配慮が求められる点や、また、今後より良い介入研究を実施していくために検討すべき課題もいくつか取り上げ、議論を深めることとする。

引用文献

向井 秀文・杉浦 義典 (2022). 考え続ける義務感の低減をターゲットとしたメタ認知療法の効果検証 パーソナリティ研究, 31, 137-147.

2.2. 「自閉スペクトラム症児における遠隔支援の実践と効果検証」

今福 理博 (武蔵野大学)

遠隔支援は、情報技術を活用して遠隔地にいる支援が必要な者に提供される (American Psychiatric Association, 2013)。本話題提供では、幼児期と児童思春期の自閉スペクトラム症児、およびその保護者への遠隔支援の実践と効果検証について、2つの研究成果をもとに紹介する。

自閉スペクトラム症の幼児と保護者を対象とした研究では、言語聴覚士が行う保護者支援も含めた親子コミュニケーションプログラムについて遠隔支援を行い、その効果を検討することを目的とした。自閉スペクトラム症と診断された幼児を対象に社会的随伴性を用いた親子コミュニケーションプログラムを実施し、介入前後で子どもの言語、コミュニケーション能力、共同注意等の社会的認知能力および情緒・行動の問題、保護者の育児ストレス、育児に対する自己効力感、抑うつ傾向を測定した。その結果、子どもの言語、コミュニケーション能力や社会的認知能力の上昇、および保護者の抑うつ症状の低下にも効果がみられた。

児童思春期の自閉スペクトラム症児と保護者を対象とした研究では、欧米を中心に有効性が実証されている Program for Education and Enrichment of Relational Skills (PEERS® Laugeson & Frankel, 2010) を、日本の児童思春期の自閉スペクトラム症児と保護者を対象に遠隔ビデオツールを用いて実施するオンライン PEERS®を構築し、その有効性・支援効果を検証することを目的とした。その結果、オンライン PEERS®によって子どもの社会性の上昇や抑うつ症状の低下、保護者の抑うつ症状の低下が認められた。

以上より、自閉スペクトラム症児と保護者への遠隔支援は、質問紙・行動指標の改善という点で効果があることが示された。本話題提供を通して、遠隔支援の効果や利点、今後の課題について議論を深めたい。

引用文献

American Psychiatric Association (APA) (2013). *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders (DSM-V). 5th Edition*, American Psychiatric Publishing, Washington DC.

Laugeson, E. A., & Frankel, F. (2010). *Social skills for teenagers with developmental and autism spectrum disorders: The PEERS treatment manual*. New York: Routledge.

2.3. 「アンチスティグマの介入研究—「心理臨床」の枠から踏み出そう—」

樫原 潤 (東洋大学)

「心理臨床における介入研究」と聞くと、多くの人は「実際のクライアントを相手に心理療法を実施し、介入の効果を測定した研究」を思い浮かべるだろう。本話題提供では、そうした固定観念を捨てることの大事さを伝えたい。「心理臨床」という言葉のイメージに囚われて、研究の選択肢を自分で狭めていないだろうか？ 心の問題で苦しむ人の負担を減らすために、心理療法以外にも何かできることはないだろうか？ そういった問いに向き合い、よくある「心理臨床」の枠から踏み出すためのきっかけを示していく。

具体的には、話題提供者自身が大学院生時代に取り組んだうつ病のスティグマ (偏見) 研究を題材に、狙い通りに結果が出たものもそうでないものも含めて3点の介入研究を紹介し、そこから得られた教訓を共有する。これらの介入研究はすべて話題提供者の著書 (樫原, 2020) で紹介されているものであり、精神医学や精神保健学の分野でアンチスティグマ研究が脈々と展開されてきたところに、社会心理学由来の潜在連合テストという方法論を導入し、新たな視座を示すことを目指したものである。「質問紙尺度上の表面的な態度変容だけで満足するのではなく、認知的な情報処理のレベルからスティグマを低減するための介入手法を確立する」という研究目標を達成するまでには、失敗を踏まえて改善するというプロセスを何度も繰り返すことになった。また、他の研究者から「あなたの研究は臨床心理学研究とは呼び難い」と言われることもあった。シンポジウム当日は、これらのエピソードを単なる苦勞自慢としてではなく、「未開拓の分野に踏み出すといろいろな苦勞が生じるが、そんなことはどうでもよくなるぐらいに新鮮な刺激が満ち溢れているので、恐れずに枠から踏み出してほしい」というメッセージを伝えるための題材として提示したい。

引用文献

樫原 潤 (2020). うつ病とスティグマの臨床社会心理学—偏見の解消に向けた挑戦— 金剛出版

大会準備委員会企画シンポジウム3

10月5日(土) 15:30~17:10
筑波大学 2B411

非認知能力の発達と測定

企画者：日本パーソナリティ心理学会第33回大会準備委員会

司会者：外山 美樹 (筑波大学)

話題提供者：後藤 崇志 (大阪大学), 海沼 亮 (松本大学), 川本 哲也 (慶応義塾大学)

指定討論者：高橋 雄介 (京都大学)

1. 企画趣旨

文部科学省(2023)の「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について一幼保小の協働による架け橋期の教育の充実一」では、子どもの発達を支援するうえで、従来、重要視されてきた「認知能力」に加えて、「非認知能力」にも着目し、お互いの関連性を認識する重要性が指摘されている。こうした指摘を踏まえると、子どもの発達において「非認知能力」が果たす役割について、より一層、議論を深めていく必要があると考えられる。

また、2年前の日本パーソナリティ心理学会第31回大会でも「経常的研究交流委員会企画シンポジウム」として、「パーソナリティ研究からみた非認知能力」が開催されている。同シンポジウムでも「情動知能」や「好奇心」などの「非認知能力」に関する諸概念について活発な議論が繰り広げられたことは、記憶に新しい。

そこで、本シンポジウムでは、「非認知能力」に関する諸概念を紹介するとともに、今回は、その発達や測定に関する研究も紹介する。具体的には、「非認知能力」に関する構成概念として、「セルフコントロール」と「パーソナリティに関する暗黙理論」について紹介する。次に、「非認知能力」の測定と評価に関する研究について紹介する。最後に、指定討論を経て、非認知能力の発達や測定について考えていく。

2. 話題提供者の要旨

2.1. 「セルフコントロールの発達と教育一価値と方略に着目して一」

後藤 崇志 (大阪大学)

長期的・規範的な目標のように得られるまでに時間がかかる行動をとるために、すぐに快が得られるが目標の

妨げとなる誘惑にどう対処するかは、セルフコントロールの問題として扱われてきた。セルフコントロールの個人差は社会的に望ましいアウトカムを予測すると考えられ、育成すべき非認知能力のひとつとして注目される。セルフコントロールは複数の心の働きに支えられているものであり、「セルフコントロールが得意」であることには、いくつかの側面がある(例えば、後藤(2020)など)。長期的な視点からの目標達成の可否という視点では、誘惑に直面した後に意志力で耐えることよりも、そもそも誘惑に直面しないように価値の認識を変えたり、あらかじめ方略で備えたりしておくことが必要だとされている。本発表では価値と方略に着目し、セルフコントロールの発達と教育について議論する。まずは価値に着目し、セルフコントロールの成否に果たす役割について実証的な知見を踏まえて検討した上で、その発達と教育可能性について、特に社会的影響の視点から議論する。続いて方略に着目し、同様にセルフコントロールの成否に果たす役割に関する実証的な知見を踏まえつつ、素朴な理解との乖離を検討し、方略の教授を意図した教育実践の事例を紹介する。その上で、セルフコントロールの教育を図る際に、考慮されるべき視点についても議論したい。

引用文献

後藤 崇志 (2020). 「セルフコントロールが得意」とはどのようなことなのかー「葛藤解決が得意」と「目標達成が得意」に分けた概念整理ー 心理学評論, 63, 129-144.

2.2. 「パーソナリティに関する暗黙理論の研究動向と介入可能性」

海沼 亮 (松本大学)

近年、人が有する知能(能力)に関する暗黙理論に加え

て、パーソナリティ (性格) に関する暗黙理論も個人の学業達成や精神的健康と関連することが報告されている (e.g., Yeager et al., 2014)。例えば, Yeager et al. (2014) は, アメリカの青年期の子どもを対象に, パーソナリティに関する暗黙理論について調査を実施した結果, 年度当初のパーソナリティに関する固定理論が年度末のストレスの高さや学業成績の低下を予測することを報告している。また, 同研究では, パーソナリティに関する暗黙理論への教育的介入がその後の学業達成や精神的健康に有益であることも示している。こうした知見を踏まえると, 児童・生徒の学校生活を支える知見を得るうえで, パーソナリティに関する暗黙理論に着目することは, 意義があると考えられる。

そこで, 本話題提供では, まず, パーソナリティに関する暗黙理論の近年の研究動向を紹介する。次に, 話題提供者が, 我が国の単位制高校の生徒を対象に, パーソナリティに関する暗黙理論への介入効果を検証した結果について報告する。これらを踏まえて, パーソナリティに関する暗黙理論の研究から得られた知見の教育的意義や今後の展望について考えていきたい。

引用文献

Yeager, D. S., Johnson, R., Spitzer, B. J., Trzesniewski, K. H., Powers, J., & Dweck, C. S. (2014). The far-reaching effects of believing people can change: Implicit theories of personality shape stress, health, and achievement during adolescence. *Journal of Personality and Social Psychology, 106*(6), 867-884.

2.3. 「非認知能力の測定・評価に関する動向と展望」

川本 哲也 (慶應義塾大学)

いわゆる非認知能力 (non-cognitive skills) は, 将来の健康関連のアウトカムや社会経済的・家族人口学的アウトカムを正に予測する, 知能検査のような認知能力の測定尺度では測ることのできない心理的特徴のまとまりを指し示すもので, J. J. Heckman による教育経済学研究以降, 特に広く知られるようになった。これまでに日本を含む複数の国で非認知能力に関するレビューが行われ, その測定方法についても検討が行われてきた。非認知能力の測定方法の問題は, そもそも非認知能力とは何であり, いかなる構造をとるか, という問題に直結する。

経済協力開発機構 (OECD) によれば, 非認知能力とは,

思考や感情, 行動の一貫したパターンに現れ, フォーマル・インフォーマルな学習経験により発達し, 社会経済的アウトカムに生涯にわたって影響を与えうる個人の能力であり, 協働性・課題パフォーマンス・情動制御・他者への関わり・知的開放性という 5 つの要素を含む (Chernyshenko et al., 2018)。しかし, これまでの非認知能力研究は数百に及ぶ多様なスキルを非認知能力として扱ってきており, 重複やジングル・ジャングルの誤謬の問題が生じていた。そこで, より統一的な定義と測定方法が必要であるという認識のもと, 社会・情動・行動スキル (social, emotional, and behavioral skills) として非認知能力を新たに定義し直す試みも行われている (Soto et al., 2022)。本話題提供では, これらの非認知能力の測定に関する研究動向をレビューした上で, 今後の展望について議論をする。そして, 測定方法に関する議論をもとに, 非認知能力の評価のあり方を批判的に検討したい。

引用文献

Chernyshenko, O. S., Kankaraš, M., & Drasgow, F. (2018). Social and emotional skills for student success and well-being: Conceptual framework for the OECD study on social and emotional skills. *OECD Education Working Papers, 173*, 1-136.

Soto, C. J., Napolitano, C. M., Sewell, M. N., Yoon, H. J., & Roberts, B. W. (2022). An integrative framework for conceptualizing and assessing social, emotional, and behavioral skills: The BESSI. *Journal of Personality and Social Psychology, 123*(1), 192-222.

大会準備委員会企画シンポジウム 4

10月6日(日) 9:00~10:40

筑波大学 2B411

社会のための動機づけ研究

企画者：日本パーソナリティ心理学会第33回大会準備委員会

司会者：三和 秀平（信州大学）

話題提供者：佐柳 信男（山梨英和大学）、閻 琳（美作大学）、大久保 智生（香川大学）

指定討論者：鹿毛 雅治（慶應義塾大学）

1. 企画趣旨

2015年には大学の文系学部の見直しの問題が世間を騒がせた。その背景には、理系の学問は役立つが、文系の学問はそうではない、という考えがあったと推測される(坂本, 2017)。このような社会に役立つかという点は心理学も例外ではない。2017年には心理学評論の特集で「社会のための心理学」が組まれているように、心理学という学問においてもどのように社会に還元するのかを考えていく必要があるだろう。そこで本シンポジウムでは、社会へ心理学研究を還元しつつ研究や実践を進めている動機づけ研究者に話題提供をしていただく。動機づけに関する関心は社会でも高く、教授・学習、非行・問題行動、労働、社会開発など多様な分野での応用されている。

その還元の方法も多様であり、実際に研究者がフィールドに出て実践的な活動をしていたり、知見を活かしたシステムを開発したりと多岐に渡る。しかしながら、このような実践は必ずしも心理学の研究として発表されているわけではなく、意外にも知られていないことが多いように思われる。本シンポジウムでは、このような取り組みにスポットライトを当て、動機づけ研究の課題や今後の発展について考えていく。

引用文献

坂本真士 (2017). 特集「社会のための心理学」にあたって
心理学評論, 60(4), 235-236.

2. 話題提供者の要旨

2.1. 「低所得国貧困農家の生活水準向上に自己決定理論を援用した SHEP アプローチ: 実践的応用の事例」

佐柳 信男（山梨英和大学）

再現性の危機が心理学を揺るがしているが、Berkman &

Wilson (2021) は、多くの心理学理論が実践と乖離しているために「実践性の危機」もあると主張する。実践性が「危機」と呼べるほどの状態かについては議論の余地はあるが、行動変容について実践的な示唆を提出できるかどうかは動機づけ理論にとってクリティカルな問題だといえるだろう。

本発表では、自己決定理論に基づき低所得国の貧困農家の行動変容および生活水準の向上に成功している国際協力機構 (JICA) の農業研修プログラム「SHEP アプローチ」の紹介を通して、より実践性のある動機づけ理論のあり方について検討する。SHEP アプローチは JICA の支援スキームの中で最も成功を収めているもののひとつで、2006年にケニアで初めて施行されてから拡大し続け、2023年度の時点において57ヶ国で累計約28万人の農家が研修を受けている。

典型的な開発援助の農家研修プログラムは、金銭や種苗・肥料といった報酬で農家の参加を促しているが、その多くでは研修した農業技術が現地に根付かないことから、外発的な報酬以外の方法で農家の参加を促すにはどうしたらよいかとの着想から SHEP は誕生した。自己決定理論の下位理論である基本的心理欲求理論を参照し、関係性欲求・コンピテンス欲求・自律性欲求を充足し、不満を回避するためにさまざまな策が施されている。結果的に、SHEP は従前の開発援助のアプローチと大きく異なる。

SHEP はランダム化比較試験等でも収入増加や持続的な行動変容の効果が確認されているが、本発表者はそのさらなる改善余地を探る研究をしている。理論から実践の示唆を得、その実践の研究から理論的な示唆を得るという循環を目指す取り組みを紹介していく。

引用文献

Berkman, E. T., & Wilson, S. M. (2021). So useful as a good theory? The practicality crisis in (social) psychology theory. *Perspectives on Psychological Science*, 16, 864-874.

2.2. 「仕事領域における動機づけ研究の応用」

閻 琳 (美作大学)

近年、少子化による人口減少の進行とともに、生産年齢人口の減少が予測され、人手不足への対策として多様な人材を受け入れる必要性が指摘されている。東京商工会議所 (2023) によると、人手不足への対策として外国人材を「受入拡大すべき」、「人手不足の業種・地域に限って受入拡大すべき」と回答した企業は全体の 67.8%であり、深刻な人手不足の中で外国人材に対する期待が高まっていると考えられる。

ところで、外国人材の増加によって人手不足が緩和される一方、喧嘩や事故、離職、失踪などの問題に多くの日本企業が直面することとなった。異文化適応の途上にある外国人材にとって日本での仕事は、日本語能力や対人関係スキルなどの不足から、職場における不適応が生じやすいと考えられる。外国人の雇用をめぐるトラブルを低減するために、職場における適応感に影響を及ぼす要因を明らかにし、適切なサポートを提供することは極めて重要であろう。

発表者は、精神的健康や適応感などを予測する理論である自己決定理論に立脚し、動機づけの観点から在日外国人留学生のアルバイト活動および外国人技能実習生の仕事における適応感について検討を行ってきた。就業を継続する動機づけについて検討した結果、金銭的な側面だけでなく、仕事自体の楽しさや仕事もつ価値を重視することが見られた。また、仕事における適応感について、より自己決定的な動機に基づいて行われた就業行動は職務満足感を高め、疲労感を抑制するということが明らかになった。本シンポジウムでは、在日外国人留学生のアルバイト活動や外国人技能実習生の仕事への支援の観点から動機づけ研究の応用について話題提供を行う。

引用文献

東京商工会議所 (2023). 「人手不足の状況および多様な人材の活躍等に関する調査」調査結果 東京商工会議所 Retrieved, May 30, 2024, from <https://www.tokyo-cci.or.jp/file.jsp?id=1201053>

2.3. 「地域と連携した非行・犯罪防止の推進」

大久保 智生 (香川大学)

これまで地域と連携して非行・犯罪防止の取組を推進してきた。具体的には、万引き防止対策に関する研究や地域防犯活動の活性化に関する研究などを行ってきた。これらの研究の根底に動機づけの視点があることは間違いない。本報告ではこれまで行ってきた研究を踏まえ、動機づけの視点の有用性について考えていきたい。

万引き防止対策に関する研究は、香川県が人口 1000 人当たりの認知件数が 2009 年まで 7 年連続ワースト 1 位であったことから、2010 年に香川県警から依頼されて開始した。被疑者の調査では犯行の動機や一般の青少年や高齢者を対象とした調査では動機の語彙について検討を行い、対策を考える上では、①魅力的な対象、②動機づけられた犯罪者、③有能な監視者の 3 者から犯罪をとらえる Felson (2002) の日常活動理論も参考にしている。さらに現場の万引き G メンの意見も取り入れ、未然防止のための店内声かけ、地域づくりを主眼とした万引き防止教育、挙動や手口の実演とホスピタリティによる店員教育、安全安心まちづくり推進店舗の認定制度、セルフレジ万引き対策などを全国に先駆けて推進してきた。こうした取組の結果、認知件数は大幅に減少し、全国ワースト 1 位を脱却している (大久保他, 2013)。

地域防犯活動の活性化に関する研究は、万引き防止対策で前述の成果を上げたことから、2017 年に香川県警察から依頼されて開始した。地域の防犯ボランティアの減少が大きな社会問題になっていることから、防犯ボランティアを対象とした調査を行い、高齢化とマンネリ化が課題になっており、内発的動機づけと同一化調整が継続のポイントであることを示している (大久保他, 2018)。これらの結果を踏まえ、犯罪機会論に基づいた防犯アプリを開発し、子どもへの防犯教育を実施するとともに、防犯ボランティアによるアプリを活用したホットスポットパトロールを推進している。さらに、パトロールランニングを行うパトラン高松を立ち上げ、若者・中年世代への防犯活動の普及も行っている。

引用文献

大久保 智生・時岡 晴美・岡田 涼 (2013). 万引き防止対策に関する調査と社会的実践 ナカニシヤ出版

大会準備委員会企画シンポジウム5

10月6日(日) 11:00~12:40

筑波大学 2B411

パーソナリティと障害支援

企画者：日本パーソナリティ心理学会第33回大会準備委員会

司会者：海沼 亮 (松本大学)

話題提供者：木田 千裕 (大阪公立大学), 岡田 有司 (東京都立大学), 佐々木 銀河 (筑波大学)

指定討論者：渡邊 芳之 (帯広畜産大学)

1. 企画趣旨

令和4年に内閣府が実施した「人権擁護に関する世論調査」では、障害者に関する人権問題として、「いじめを受けること(43.3%)」や「差別的な言葉を言われること(38.9%)」が上位として挙げられている。2024年には、「改正障害者差別解消法」が施行されるなど、障害に対する考え方や態度に関する社会的な関心も高まっていることがうかがえる。

また、本大会の会場となる筑波大学の前身、東京教育大学の歩みを振り返ると、1951年に我が国、最初の障害児関係の専門学科が設置されたという歴史がある。その後、現在の筑波大学では、すべての障害を対象としながら、学際的な「障害科学」に関する様々な研究が進められている知の拠点でもある。

そこで、本シンポジウムでは、障害のなかでも、身体障害や発達障害に関する「態度」についてパーソナリティの観点も踏まえて検討した研究を紹介する。続けて、大学における障害学生の学修や学生生活支援に関する取り組みについて紹介する。最後に、障害支援の現状と研究動向、今後の在り方について考えていく。

2. 話題提供者の要旨

2.1. 「障害者支援を阻む態度とは一差別『してしまう』心理」

木田 千裕 (大阪公立大学)

昨今、障害者に対する差別や偏見をなくそうという社会情勢に伴い、障害者の自立や社会参加を支援する取り組みが急速に推進されている。とりわけ、2024年4月には、社会的な障壁を取り除くための合理的配慮の提供が義務化された。その一方で、障害者支援を特別扱いとし、

優遇だと主張する声も存在するなど、支援への風当たりは強い。障害者に対する差別や偏見の是正に逆らうように、なぜ障害者とその支援への反発や反感が表出されるのだろうか。

これまでの心理学分野における研究においても、社会の人々が障害者に対して表明する態度や行動は否定的・消極的であることが一貫して示されてきた(Dunn, 2015)。障害者に対する差別や偏見の改善に向けて、先行研究では障害者との接触や交流が有効であることも態度研究の早期の段階で検証されている(e.g., 山内, 1996)。しかし、それらの効果は実際のところ限定的であり、根本的な差別・偏見の解決には至っていない。また、近年の研究で、社会的な不平等や不公正さを容認し正当化する信念や価値観が人間の普遍的な心的装置としてあるゆえ、差別や偏見の問題解決が難しいことが指摘されている(池上, 2012)。

本発表では、日本における障害者を取り巻く現状を紹介し、これまでの心理学における障害者に対する態度研究をまず概観する。そして、どのような要因が障害者支援の促進を妨げ、どうして否定的態度を規定しているのか、その心理機制を明らかにするために話題提供者がこれまでに実施してきた一連の研究を紹介する。特に、現行の社会において、障害者差別を正当化する心理的過程に着目した上で、障害者への偏見の最大の特徴として挙げられる、「障害者は能力が低い」「できない」という認知(Fiske et al., 2002)とどのように関連しているか、差別を「する」側の視点を考えるとともに、障害者差別と障害者「支援」にどのように向き合うかを議論したい。

引用文献

Dunn, D. S. (2015). *The social psychology of disability*. Oxford

university press.

Fiske, S. T., Cuddy, A. J. C., Glick, P., & Xu, J. (2002). A model of (often mixed) stereotype content: Competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82(6), 878–902.

池上知子 (2012). 格差と序列の心理学—平等主義のパラドクス— ミネルヴァ書房

山内隆久 (1996). 偏見解消の心理—対人接触による障害者の理解— ナカニシヤ出版

2.2. 「発達障害に対する大学生の態度とその変容の試み」

岡田 有司 (東京都立大学)

障害者差別解消法の制定を背景に、大学では発達障害を含む障害のある学生に対して、合理的配慮の取り組みが進められている。しかし、発達障害のある学生が大学生生活を適応的に過ごすためには、当事者に対する個別的な支援はもちろん、周囲の学生の発達障害に対する理解も重要である。このことは、近年の高等教育領域で国際的にも関心が高まりつつある DEI(Diversity, Equity and Inclusion)の問題とも密接に関係している。発達障害に対する一般の認知は広まり、その用語自体は大学生にも浸透している。しかし、発達障害の内実が多様であり、正確な理解が伴わないまま用語のみが独り歩きしている面も否めない。そうした中で、発達障害に対する偏った態度が形成されてしまう可能性もあると考えられる。

以上の問題意識に基づき、本話題提供ではまず、大学生の発達障害に対する態度にどのような要因が関連しているのかを、接触仮説の視点から検討する(岡田, 2023)。具体的には発達障害への直接的・間接的な接触が、発達障害に対する顕在的・潜在的態度にどう影響するのかについて考察する。次に、大学生の発達障害に対する態度変容のための障害理解教育の試みについても報告する(林・岡田, 2020)。先述のように、発達障害についての認知は広まっているが、発達障害に関する正確な知識を身につけられる場は限られていると考えられる。報告者は共通教育科目の中で発達障害理解教育を実践しており、それによる学生の態度変容について顕在的・潜在的指標の双方から検証している。当日は分析から得られた知見に基づき、どのような教育が態度変容に有益なのかについて考察していく予定である。

引用文献

林慎吾・岡田有司 (2020). 発達障害理解教育を通じた大学生の発達障害に対する態度変容—潜在的及び潜在的指標に注目して— 障害理解研究, 20, 1-13.

岡田有司 (2023). 発達障害への接触経験が大学生の発達障害に対する態度に与える影響 パーソナリティ研究, 32, 96-98.

2.3. 「大学における障害学生支援と人々の態度」

佐々木 銀河 (筑波大学)

2024年4月より、私立大学を含め全ての学校において障害のある学生への「合理的配慮」の提供が義務となった。これにより、各大学で障害学生支援、特に合理的配慮の提供体制を整えることが社会的に強く要請される時勢にあるが、課題も多い。例えば、「合理的配慮」(reasonable accommodation)の本来の意味は「変更及び調整」を指すにもかかわらず、日本では「気遣い」や「気配り」といった意味に捉えられやすいと言われている(高橋, 2016)。すなわち、障害学生が合理的配慮を要請することは「気遣いが必要な人である」という誤解を周囲の人にもたらし、本来は障害学生を取り巻く社会の問題であるにもかかわらず、障害学生個人の問題にすり替える懸念がある。また、合理的配慮を提供するプロセスにおいて、教員が「良かれ」と思って障害学生に他専攻への転籍を促したり、合理的配慮を受けることで障害学生本人の貢献が軽視されたりといった周囲の態度が見られると報告されている(Toutain, 2019)。このように、大学の障害学生支援においては「社会的障壁(バリア)」を取り除くはずである合理的配慮の提供プロセス自体が、障害学生に新たなバリアをもたらす懸念を有している。本話題提供では、大学における障害学生支援と合理的配慮の動向ならびに大学での取り組みを紹介する。その後、「態度」に関連する研究例として、注意欠如・多動症(ADHD)のある学生が他の学生に自身の困難さを相談する仮想事例動画を用いて、ADHDの診断ラベルを提示するか否かによって動画を視聴した大学生がどのような反応を示すかを検討した実験の結果を紹介する。

大会準備委員会企画シンポジウム 6

10月6日(日) 13:00~14:40

筑波大学 2B411

パーソナリティから「大学スポーツ」について考える

企画者：日本パーソナリティ心理学会第33回大会準備委員会

司会者：海沼 亮 (松本大学)

話題提供者：上野 雄己 (東京大学), 高橋 由衣 (国立スポーツ科学センター), 小井土 正亮 (筑波大学)

指定討論者：尾見 康博 (山梨大学)

1. 企画趣旨

2022年のFIFAワールドカップや2023年のワールド・ベースボール・クラシック(WBC)での日本代表選手の活躍は、記憶に新しい。また、2024年は、パリで夏季オリンピックが開催されるなど、世界のアスリートたちのパフォーマンスに、胸躍る日々が待ち受けている。さらに、本大会の会場となる筑波大学は、国立大学の中でも珍しく、「体育専門学群」という体育を専門とした学部が設けられている。そして、スポーツ界に数々のアスリートや指導者を輩出してきた歴史もある。例えば、2022年のFIFAワールドカップで活躍を見せたサッカー日本代表の中で、「谷口彰悟選手(2013年度卒業)」、「三笥薫選手(2019年度卒業)」は、同校、蹴球部の卒業生である。こうしたアスリートのキャリア形成過程は、世界的にも珍しく、2023年、FIFAで日本サッカーの育成システムの特徴の1つとして、大学での部活動が紹介されている。

そこで、本シンポジウムでは、大学生アスリートを対象としたパーソナリティに関する研究や大学スポーツの指導の取り組みを紹介する。具体的には、大学生アスリートを対象とした「レジリエンス」や「認知的方略」に関する知見を紹介する。次に、大学スポーツの指導の現場での組織的取り組みや個の育成に関するアプローチを紹介する。これらを踏まえて、大学スポーツとパーソナリティのかかりについて考えていく。

2. 話題提供者の要旨

2.1. 「スポーツとレジリエンス」

上野 雄己 (東京大学)

情勢の変化が激しく予測不可能なVUCAの時代において、大学スポーツの現場に求められることは多い。アスリートが競技生活で経験する困難な出来事として、例えば、

大きな怪我や競技成績の停滞、対人関係のトラブル、環境の変化などが挙げられる。特に学生アスリートの場合にはこうした状況に加え、大学生活との両立や将来のキャリアを考えなければならず、大学(大学スポーツ)という環境はアイデンティティを形成するうえで大きな転換期といえる(萩原他, 2020; 並木・堀野, 2023)。

こうした困難な状況に対してうまく対処できないことは心理的な健康の悪化に繋がるだけでなく、精神病理学的な問題へと発展する可能性も少なくはない。一方で、こうした状況から一時的に不適応を経験しながらも元の状態へと回復し、輝かしい功績を残す人たちも存在する。このような個人差を理解するうえで、レジリエンスという概念がある。レジリエンスは「困難で脅威的な状況にもかかわらず、うまく適応する過程・能力・結果」(Masten et al., 1990)とされ、特性的なレジリエンスが心の回復に影響すると考えられている。

レジリエンスがスポーツという独自の領域にフィットしたのは単なるアスリートの健康増進に繋がるだけでなく、パフォーマンスにも肯定的な結果をもたらす可能性があるからである(Gupta & McCarthy, 2022; Nuetzel, 2023; 上野, 2021)。競技を第一に考えトップを目指すアスリートが最も求めるものはパフォーマンスの高さであり、心理的な健康も含めた包括的なアプローチが必要とされる。昨今、諸外国においては大学スポーツの中でレジリエンスを高める実践研究も行われるようになってきている(Kuchar et al., 2023; Sullivan et al., 2023)。そこで本シンポジウムでは、大学スポーツにおけるレジリエンスの役割を紹介し、今後の実践と研究の展望について考えてみたい。

主な引用文献

上野 雄己 (2021). レジリエンスと身体活動・スポーツ

小塩 真司・平野 真理・上野 雄己 (編) レジリエンスの心理学—社会でよりよく生きるために— (pp.108-117) 金子書房

2.2. 「大学生アスリートの認知的方略の特徴」

高橋 由衣 (国立スポーツ科学センター)

パフォーマンス発揮に有効な考え方は、必ずしもポジティブなものだけでなく、さらにいえば、従来のようにポジティブ思考が良く、ネガティブ思考が悪いといった二極的な考え方でもない。これらを裏付けるかのように、アメリカの心理学者である Norem (2001) はネガティブ思考の機能や有用性に着目し、防衛的悲観主義という認知的方略を提唱している。従来の認知的方略に関する研究では、主に方略的楽観主義 (Strategic Optimism : SO) と防衛的悲観主義 (Defensive Pessimism : DP) という2つの認知的方略に焦点があてられてきた。前者は物事を「良い方向に考える」ことで成功し、後者は物事を「悪い方向に考える」ことで成功するという特徴をもつ。なかでも、昨今のスポーツ現場では、物事を「悪い方向に考える」ことで成功する DP 者の存在に注目が集まっている。トップアスリートでいえば、オリンピックで金メダルを獲得したスピードスケート選手や柔道選手が DP の認知的方略を利用していたという事実が新聞や学術論文等で示されている。実際、DP 者のパフォーマンスは SO 者に劣っていないと報告する先行研究は数多く存在する (e.g., Norem & Illingworth, 1993)。DP 者がパフォーマンスを発揮するメカニズムとしては、これから起こり得る最悪の結果を考え、失敗やミスを防ぐための熟考や準備を徹底することで、結果的に高いパフォーマンスにつながる想定されている。これらを踏まえると、パフォーマンス発揮に有効な認知的方略は一つとは限らず、これらは個人特性に応じて適応的にも不適応的にもなり得るものなのであるといえる。

本シンポジウムでは、発表者が実施した大学生アスリートの認知的方略に関する一連の研究を紹介しながら、大学生アスリートの個人特性に応じた認知的方略の在り方について議論を深めていきたいと考えている。本発表が個人特性に応じた心理支援を確立するための一助になることを願う。

引用文献

Norem, J. K. (2001) Defensive pessimism, optimism, and

pessimism. In E. C. Chang (Ed.), *Optimism and pessimism: Implications for theory, research, and practice* (pp.77-100). American Psychological Association.

Norem, J. K. & Illingworth, K. S. S. (1993) Strategy-dependent effects of reflecting on self and task: Some implications for optimism and defensive pessimism. *Journal of Personality and Social Psychology*, 65, 822-835.

2.3. 「筑波大学蹴球部の取り組み」

小井土 正亮 (筑波大学体育系)

筑波大学蹴球部は1986年に創設された「フットボール部」を起源に持ち、日本でもっとも長い歴史を有する組織である。弊部の特徴としては、「開かれた大学」という大学の精神に基づき「開かれた組織」であることが前提となっており、入部を希望する者に対しては常に門戸が開かれている。そのため基本的には誰でも入部をすることができ、今年度は186名の部員が在籍し、さらに大学院生がコーチやトレーナーとして20名弱関わる大所帯である。その内訳をみてみると、高校年代で世代別の代表選手に名を連ねていた学生、医学群に在籍しながらプレーする学生、情報学群に在籍し、アナリストとして専任でその業務に当たる学生など多種多様である。監督である筆者としては、この組織がそうした多様性を受け入れ、一人ひとりの学生がもっている能力やスキルを存分に発揮できるような場となるように心がけて運営しているつもりである。大学スポーツを取り巻く環境も年々変化していることを実感している。そうした中での組織づくり、運営の難しさや工夫について紹介する。

そうした環境から育っていった代表的な人物として、三笠薫 (2019年度卒業) が挙げられる。現在は日本代表として2022年カタールワールドカップでも獅子奮迅のプレーぶりを見せ、今後さらなる活躍が期待されている。彼は川崎フロンターレの下部組織に所属していた高校3年生時、トップチームへの昇格を断って、弊学へ進学してきたという経緯がある。プロ選手になることを目標に活動してきたであろう若者があえて遠回りになるかもしれない「大学」という選択をしたのはなぜか。彼とのエピソードを交えつつ、彼の成長の過程を振り返ることで、これからの大学スポーツの価値や意義について考えるきっかけとしたい。

大会準備委員会企画シンポジウム 7

10月6日(日) 15:00~17:00

筑波大学 2B411

近年におけるセルフ・コンパッション研究の流れ —多様な介入方法の開発と今後の展開—

企画者：日本パーソナリティ心理学会第33回大会準備委員会

司会者：長峯 聖人（江戸川大学）

話題提供者：菅原 大地（筑波大学）、水野 雅之（筑波大学）、千島 雄太（筑波大学）、雨宮 怜（筑波大学）

指定討論者：岸本 早苗（東京女子医科大学）

1. 企画趣旨

近年、セルフ・コンパッション (self-compassion) が注目されている。セルフ・コンパッションには、自分自身の苦しみに心を開き、心を動かされること、自分自身を思いやり、親切にする感情を経験すること、自分の不十分さや失敗を理解し、偏見を持たない態度をとること、自分自身の経験も人間共通の経験の一部であることを認識することが含まれる (Neff, 2003)。セルフ・コンパッションは一貫して精神的適応に良好な影響を及ぼすことが明らかになっている。

セルフ・コンパッションが提唱されて以降、数多くの基礎研究が行われており、オーバーフローにも近い状態である。今後は、応用研究に研究者らの関心がシフトしていくと予想されるが、介入の手続きや実施方法については未検討な部分が多く、論文には書かれていないような実施上の困難もある。そこで本シンポジウムでは、わが国においてセルフ・コンパッションに関する応用研究を精力的に進めている4名の先生方に話題提供をいただく。そして、指定討論を交えて応用研究で得られた知見と課題について議論を行い、今後の研究の展開を模索する。

引用文献

Neff, K. D. (2003). The development and validation of a scale to measure self-compassion. *Self and Identity*, 2(3), 223–250. <https://doi.org/10.1080/15298860309027>

2. 話題提供者の要旨

2.1. 「慈悲の瞑想のウェブアプリ開発と効果検証」

菅原 大地（筑波大学人間系心理学域）

慈悲の瞑想 (loving-kindness meditation) は、「〇〇が幸せでありますように」といったフレーズを心の中で唱えることによって、自分や他者に対する温かな気持ちを育む瞑想である。慈悲の瞑想に関するメタ分析は数多く報告されているが (e.g., Petrovic et al., 2024), その作用機序や効果の個人差について検討した研究は少ない。また、近年ではアプリケーションを用いた介入研究も増えているが、得られる効果や効果量もばらつきが大きい。

そこで、本話題提供では独自に作成したウェブアプリを用いて慈悲の瞑想の作用機序とパーソナリティフィットについて検討した複数の研究を紹介する。(1) ウェブアプリのみで慈悲の瞑想を実施した場合の効果, (2) 時系列データによる慈悲の瞑想の作用機序, (3) 慈悲の瞑想が奏功する者としらない者の個人差について報告する。ウェブアプリ開発のように社会実装を見据えながらセルフ・コンパッションの研究することの意義について、話題提供者らの活動も紹介しながら考えを述べていく。

引用文献

Petrovic, J., Mettler, J., Cho, S., & Heath, N. L. (2024). The effects of loving-kindness interventions on positive and negative mental health outcomes: A systematic review and meta-analysis. *Clinical Psychology Review*, 110, 102433. <https://doi.org/10.1016/j.cpr.2024.102433>

2.2. 「3種類のセルフ・コンパッションの手紙の効果・受容性の比較」

水野 雅之（筑波大学人間系心理学域）

セルフ・コンパッションの手紙はコンパッションに基づく介入 (Compassion-based intervention: Kirby et al., 2017) で用いられるアプローチのひとつであり、わが国におい

でも、その有効性を示すエビデンスが増加している(たとえば、松岡他, 2023; 水野他, 印刷中)。セルフ・コンパッションの手紙には、①思いやりのある自分から他の人に宛てた手紙を書く、②思いやりのある自分から自分に宛てた手紙を書く、③思いやりのある他の人から自分に宛てた手紙を書くという3つの手続きがあるとされる(岸本 2021; Neff & Germer, 2018) が、これら3つの手続きにどのような特徴があるのかについて、十分に比較検討されていない。

本話題提供では、(1) 3種類のセルフ・コンパッションの手紙の短期的な介入効果の比較、(2) 介入効果に影響を及ぼすパーソナリティ変数に関する探索的検討、(3) 3種類のセルフ・コンパッションの手紙の受容性 (acceptability) の観点からの比較、(4) 受容性に影響を及ぼすパーソナリティ変数に関する探索的検討に関する知見を紹介し、セルフ・コンパッションの介入への理解を深めることとする。

引用文献

Kirby, J. N., Tellegen, C. L., & Steindl, S. R. (2017). A meta-analysis of compassion-based interventions: Current state of knowledge and future directions. *Behavior Therapy, 48*(6), 778–792. <https://doi.org/10.1016/j.beth.2017.06.003>

2.3. 「VR を用いた介入方法の開発」

千島 雄太 (筑波大学人間系心理学域)

セルフ・コンパッションの導入には抵抗感が伴いやすい。その抵抗感を取り除くための一つの有効な方法として、自分をよく知る友人が困難な状況にある時に、どのような言葉かけを行うかを想像し、同じような態度を自分に向けてことが提案されている。つまり、自分自身だけでなく仮想の友人を介して自己内対話を行うことで、自分を思いやることへの抵抗が薄れるというアプローチである。

このような自己内対話には、友人の鮮明なイメージを持ちつつ、自分と友人の視点の入れ替えをスムーズに行う必要があり、現実ではそれを実行することに障壁があるが、VR空間であれば比較的容易に実現することができる。実際に、近年 VR を用いた自己内対話の実験や介入研究は進みつつあり、その有効性が示され始めている(cf., Slater et al., 2019)。しかしながら、話題提供者の知る限り、セルフ・コンパッションを主題とした介入方法の開発やその実証は、まだほとんど行われていない。

本話題提供では、友人アバターとの対話を通して、セルフ・コンパッションを体験的に理解できる VR 環境とその効果検証の結果について報告する。アバターや VR 空間を用いることの有効性に関して議論ができればと思っている。

引用文献

Slater, M., Neyret, S., Johnston, T., Iruretagoyena, G., Crespo, M. Á. D. L. C., Alabèmia-Segura, M., ... & Feixas, G. (2019). An experimental study of a virtual reality counselling paradigm using embodied self-dialogue. *Scientific Reports, 9*(1), Article 10903. <https://doi.org/10.1038/s41598-019-46877-3>

2.4. 「自分への思いやりはアスリートに必要か？」

雨宮 怜 (筑波大学体育系)

アスリートは、自身の記録や他者との競争に加えて、失敗や怪我、地位 (e.g., レギュラーや代表) の喪失が生じる状況におかれやすいことが指摘されている (McEwan & Zhang, 2023)。そして、このような状況が続くことで、一般の人々と同程度、メンタルヘルスの問題を経験することが知られるようになってきた (Reardon et al., 2019)。しかしながらアスリートのように、誰かと競争しながら、優れた成績が求められる人々の中には、対戦相手といった他者だけではなく、自分自身にもあえて厳しい態度を向ける者が一定数存在し、さらにそのような態度は、一般の人々からも、強靭さを持つ選手として評価される場合がある。

本話題提供では、アスリートのメンタルヘルスやパフォーマンスと心との関係、関連する問題の実態に加えて、その対応策としてのセルフ・コンパッションの役割について紹介する。そして、アスリートをはじめ、競争という状況の中で、一見、自分に対して思いやりを持つことを必要としない(受け入れない)態度を示す人々に対して、セルフ・コンパッションを導入する意義と難しさを、話題提供者の研究やアスリートへの心理支援の経験、また近年発表された関連論文の知見を紹介しながら検討したい。

引用文献

Zhang, S., & McEwan, K. (2023). The Fears of Compassion in Sport Scale: A short, context-specific measure of fear of self-compassion and receiving compassion from others validated in UK athletes. *Australian Psychologist, 58*(2), 105–118. <https://doi.org/10.1080/00050067.2023.2183108>

大会準備委員会企画セミナー

10月5日(土) 9:00~10:20

筑波大学 2A410

仮説をより柔軟な形へ —「差がある」を超えた仮説の検定—

企画者：日本パーソナリティ心理学会第33回大会準備委員会

司会者：湯立（長崎大学）

講師：山口 一大（筑波大学人間系心理学域）

【企画趣旨】

統計的仮説検定を用いたほとんどの研究は、「差がある」、「関連がある」といった予測を検証することを目的としている。これらの研究では、「差が0である」、「関連はない」という帰無仮説のもとで検定が行われている。しかし、検定の本来の形からすれば、より柔軟に仮説を設定することが可能である。例えば、「新しい介入法は、従来の介入法と同等な効果を持つのか」、「新しく開発した尺度と異なった概念を測定している尺度との相関係数は、想定する範囲に収まるのか」または「新しく開発した尺度と類似する概念を測定している尺度との相関係数は、予想した強さを超えるのか」、といった仮説に関心を持つ場合があるかもしれない。

本セミナーでは、これらの現実的な意味を持つ仮説を検証するための同等性検定・最小効果量検定の手法、およびその他の統計的検定の話題について、基礎知識から分析の実践まで解説する。

【講師略歴】

筑波大学人間系心理学域助教。東京大学大学院教育学研究科博士課程修了（博士（教育学））。日本学術振興会特別研究員（PD）、アイオワ大学客員研究員を歴任。心理統計学（計量心理学）、教育測定学、テスト理論、ベイズ統計学が専門。日本行動計量学会 2020 年度肥田野直・水野欽司賞（奨励賞）、2023 年度林知己夫賞（優秀賞）を受賞。

【主な論文】

- ・ Yamaguchi, K., & Martinez, A. J. (2023). Variational Bayes inference for hidden Markov diagnostic classification models. *British Journal of Mathematical and Statistical Psychology*, 77(1), 55-79. <https://doi.org/10.1111/bmsp.12308>
 - ・ Yamaguchi, K. (2023). Bayesian analysis methods for two-level diagnosis classification models. *Journal of Educational and Behavioral Statistics*, 48(6), 773-809. <https://doi.org/10.3102/10769986231173594>
- ※そのほかの研究業績に関しては、山口先生の HP (<https://sites.google.com/site/kazzstat/>) や researchmap (<https://researchmap.jp/yamaguchikazuhiro>) をご参照ください。

大会準備委員会企画ラウンドテーブル

10月5日(土) 12:30~14:10

筑波大学 2A410

宇宙心理学の確立に向けた挑戦 —宇宙開発における心理学の重要性と課題—

企画者：日本パーソナリティ心理学会第33回大会準備委員会

司会者：浅山 慧（筑波大学大学院）

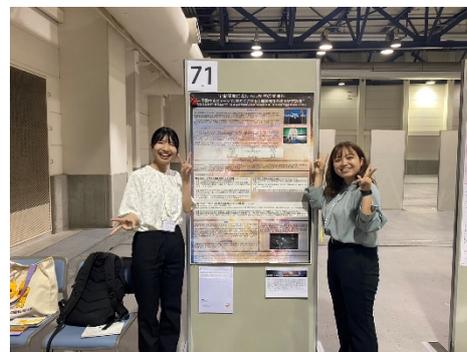
話題提供者：三垣 和歌子（筑波大学大学院産業精神医学・宇宙医学グループ）

藤井 あかり（筑波大学大学院産業精神医学・宇宙医学グループ）

【企画趣旨】

宇宙は、人類がいまだにそのほとんどを解明することができていない未開拓なフロンティアである。宇宙開発は、人類の将来の発展のために、そのような未解明な宇宙を解き明かし、宇宙空間の利用のための開発を行う活動である。宇宙飛行士は、地上から約 400 km離れた宇宙空間にある国際宇宙ステーション（ISS）に滞在し、時には船外に出て、宇宙開発のために活動する。ISS での生活は、閉鎖された空間、そしてその中での閉じた人間関係、地上との遠隔コミュニケーション、さらに無重力による生理的影響や危険の伴う船外活動など、非常に多くのストレスにさらされる。宇宙心理学とは、そのような宇宙空間で生活する人が精神的に健康に過ごせるヒントや支援方法を模索する、宇宙空間における人間の心理・行動に関する学問である。

しかしながら、実際に ISS に滞在している宇宙飛行士を対象にした研究を行うには様々な困難が伴う。そこで、宇宙心理学の多くの研究では、閉鎖・遠隔・隔離などの点で類似した環境（模擬実験施設、南極観測隊など）に置かれた人を対象にすることで、宇宙飛行士や未来の宇宙旅行者等への支援に役立てようと試みられている。本ラウンドテーブルでは、データ収集が難しく、国内研究も非常に少ないこの分野のフロンティアを拓いておられる2名の研究者に、宇宙心理学の現状と可能性について話題提供していただく。三垣氏は、ロシアの模擬実験施設で実施された240日間の実験プロジェクト（SIRIUS）で収集されたデータを基に、閉鎖環境におけるグループ・ダイナミクスについての研究に取り組んでいる。藤井氏は、主に質的なアプローチで、過去に閉鎖環境を経験した人を対象に、閉鎖環境への適応とその後の通常生活への再適応についての研究に取り組んでいる。本企画はラウンドテーブル形式であり、お二人からの話題提供を基に、参加者の皆様と自由に意見交換しながら、宇宙空間で生活する人への心理的支援に向けた心理学的研究について一緒に考えていければ幸いである。



(写真は左から、藤井氏、三垣氏)

大会準備委員会・機関誌編集委員会共同企画講習会

10月6日(日)9:00~11:00

筑波大学 2A410

論文掲載への道標

— 「パーソナリティ研究」の場合 —

企画者：日本パーソナリティ心理学会第33回大会準備委員会・機関誌編集委員会

司会者：外山 美樹 (筑波大学)

話題提供者：小塩 真司 (早稲田大学・日本パーソナリティ心理学会機関誌編集委員長)

中井 大介 (埼玉大学・日本パーソナリティ心理学会機関誌副編集委員長)

上田 皐介 (名古屋大学・日本学術振興会特別研究員(DC2))

萩原 千晶 (早稲田大学)

【企画趣旨】

「パーソナリティ研究」は日本パーソナリティ心理学会(旧：日本性格心理学会)の機関誌である。1993年に「性格心理学研究」として創刊され、2003年に学会の名称変更にもない現在の名称となった。現在年1巻(3号)が刊行されている。「パーソナリティ研究」は、パーソナリティ/人格や性格、気質についての研究を中心に、それと関連する幅広い分野の研究論文を掲載している。掲載する価値のある論文でさえあれば、基礎研究でも実践研究でも、理論研究でも実証研究でも、量的研究でも質的研究でも、研究の志向性や方法を問わず掲載しているのも、「パーソナリティ研究」の特徴である。「パーソナリティ研究」に掲載される論文は、「原著」、「ショートレポート」の2種類であるが、2018年11月より、「ショートレポート」内の新たな投稿区分として、「追試研究」、「事前登録研究」、「事前登録追試研究」が追加された。

論文投稿・掲載に至るプロセスをどう攻略していくのかは明確ではないため、学術論文を初めて投稿する若手研究者はこれらのプロセスで躓くこともある。投稿された論文がどのように審査されるのか、査読のコメントにどう対応したらいいのか、そもそも論文の完成度を高めるにはどうしたらいいのか等の問題に直面し、論文投稿に高い壁を感じている方もいることだろう。

本企画では、「パーソナリティ研究」の編集委員長、副編集委員長から、投稿・公刊に至るプロセスや不採択理由の分析からみた投稿準備に焦点を当てたお話をさせていただく。また、「追試研究」、「事前登録研究」、「事前登録追試研究」が新たに始まって5年が経った現在の状況についてお話いただく。さらに、近年、「パーソナリティ研究」に精力的に論文を出版されている若手研究者から、論文投稿のプロセスに関する経験や提言を共有いただく。その後フロアからの論文投稿・掲載に関するさまざまな質問を受け付け、今後多くの若手研究者が直面するであろう問題に焦点を当てて議論していく予定である。

本企画が、これからの時代を担う若い研究者の論文投稿・掲載を後押しすることになれば幸甚である。

経常的研究交流委員会企画シンポジウム

10月5日(土) 13:30~15:30

筑波大学 2B412

ソーシャルメディア時代 —パーソナリティ研究から何が言えるか—

企画者：日本パーソナリティ心理学会経常的研究交流委員会

司会者：閻 琳 (美作大学)

話題提供者：太幡 直也 (愛知学院大学), 鈴木 千晴 (立命館大学), 黒川 雅幸 (愛知教育大学)

指定討論者：中山 満子 (奈良女子大学)

1. 企画趣旨

近年、ソーシャルメディアが世界的に普及するにつれ、ユーザー行動に対する関心が高まっている。これまでの研究では、パーソナリティ特性とソーシャルメディアの利用パターンとの関連、ソーシャルメディアの利用が人々の行動に及ぼす影響、さらに、ソーシャルメディアにおけるいじめや攻撃行動などの問題行動について多くの研究知見が蓄積されている。

そこで本シンポジウムでは、ソーシャルメディアの利用に関連する研究課題に取り組んでいる3名の研究者にご登壇いただき、それぞれが異なる視点からソーシャルメディアの利用とパーソナリティとの関連について話題を提供していただく。その後、指定討論とフロアディスカッションを通じて、各研究領域の今後の方向性と課題について探っていきたい。

2. 話題提供者の要旨

2.1. 「SNS上で自己、他者の情報を多く公開している人はどんな人?—プライバシーに関するパーソナリティの観点から—」

太幡 直也 (愛知学院大学)

SNSが普及するにつれ、SNS上で自己、他者に関する情報を公開することが容易になった。しかし、情報公開の仕方次第では、さまざまな問題を引き起こす可能性がある。自己情報公開については、個人情報悪用される、未知の他者から望んでいないのに繰り返し連絡を受けるといった、不快な経験をもたらす可能性が高まることが考えられる。また、他者情報公開については、情報を公開された者にネガティブな感情を生起させるだけでなく、情

報を公開する行為がプライバシーの侵害にあたる危険性を孕んでいる。

話題提供者は、SNS上での自己情報公開 (e.g., 太幡・佐藤, 2016, 2018), 他者情報公開 (e.g., 太幡・佐藤, 2019, 2021) を規定する要因について、プライバシー (自己情報に対する他者からのアクセスの規制; Altman, 1975; Westin, 1967) に関するパーソナリティの観点から検討してきた。本発表では、話題提供者の一連の研究結果を報告し、SNS上での情報公開に関する問題を抑止する方策を考える視座を提供することを試みる。

引用文献

Altman, I. (1975). *The environment and social behavior: Privacy, personal space, territory, crowding*. Brooks/Cole.

太幡 直也・佐藤 広英 (2016). SNS上での自己情報公開を規定する心理的要因—パーソナリティ研究, 25, 26-34. <https://doi.org/10.2132/personality.25.26>

太幡 直也・佐藤 広英 (2018). 情報プライバシーとインターネット上の未知の他者への自己情報公開との関連—対面の予期を操作した検討— パーソナリティ研究, 27, 53-63. <https://doi.org/10.2132/personality.27.1.12>

太幡 直也・佐藤 広英 (2019). Twitter上での他者情報公開を規定する心理的要因—友人、知人に関する情報公開に着目して— パーソナリティ研究, 27, 235-245.

太幡 直也・佐藤 広英 (2021). 他者のプライバシー意識とTwitter上での他者情報公開との関連—心理学研究, 92, 211-216. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.92.20327>

Westin, A. F. (1967). *Privacy and freedom*. Atheneum.

2.2. 「ソーシャルメディアの利用が人々の行動に及ぼす影響—見知らぬ人と交流・対面する子どもを対象に—」

鈴木 千晴 (立命館大学)

ソーシャルメディアの普及以来、他者とのつながりが大きく様相を変えてきたことは、大人だけではなく子どもにとっても重要な意味をもつ。2019年にはTwitter(現X)に起因する児童誘拐事件が話題となったが、SNSに起因する事件の令和5年次の被害児童は1,665人にも上る(警察庁, 2024)。2023年の調査では、小学校高学年のスマートフォン所有率は4割を超えており(モバイル社会研究所, 2024)、子どもが見知らぬ他者と知り合ったり、実際に対面したりすることも容易になっているといえる。

見知らぬ他者と交流・対面する子どものソーシャルメディア利用や心理的特性には、どのような特徴があるだろうか。我々は2020年から全国の公立小・中学校を対象に調査を行い、知覚されたソーシャルサポート、家族満足度、注意制御との関わりを調べた。本話題提供では研究成果を概括し、子どもの見知らぬ他者との交流・対面という行動へのソーシャルメディアの影響について考える。

本研究に着手した2019年時点では、話題になっていたSNSはTwitter(現X)だったが、InstagramやTikTok、それ以降も多種多様なサービスが隆盛し、子どもにとって身近なメディアは刻々と変化している。オンラインゲームでの交流をきっかけとする事件も報じられるなど(朝日新聞デジタル, 2020)、子どもが見知らぬ人と交流する手段は今やSNSに限定されない。戦績やオンライン状態の可視化、ショート動画など、注意を誘引し、ソーシャルメディア利用を継続させるような様々な工夫が日々生み出される現況において、子どもをめぐるオンライン・オフラインの対人関係について考察する。

引用文献

朝日新聞デジタル (2020). 小4 児童誘拐 容疑者がゲームで連絡、会う約束したか 朝日新聞 Retrieved May 28, 2024, from <https://www.asahi.com/articles/ASN95219XN95ULOB001.html>

警察庁 (2024). 令和5年における少年非行及び子供の性被害の状況 警察庁 Retrieved May 28, 2024, from <https://www.npa.go.jp/publications/statistics/safetylife/syonen.html>

モバイル社会研究所 (2024). モバイル社会白書 2023年版 モバイル社会研究所 Retrieved May 28, 2024, from

<https://www.moba-ken.jp/whitepaper/wp23.html#c07>

2.3. 「ソーシャルメディアの利用における問題行動」

黒川 雅幸 (愛知教育大学)

令和5年度青少年のインターネット利用環境実態調査の結果によると、2歳で58.8%の子どもが、5歳で79.4%の子どもがインターネットを利用しているという実態が報告されている(こども家庭庁, 2024)。未就学児でさえ、インターネットは関心の高いものであり、身近なものになっていると考えられる。

一方で、青少年を中心に、ソーシャルメディアを利用した問題行動に関する報道は後を絶たない。不適切な行為を行った動画をインターネット上にアップロードしたり、闇バイトや特殊詐欺に加担したりするといったニュースを目にする。また、ソーシャルメディアを利用して、他者を傷つけるメッセージを発したり、グループやコミュニティから仲間はずれにしたりするネットいじめや、インターネットに精神的に依存してしまうネット依存の問題も少なからず起きている。

本シンポジウムでは、発表者がこれまで研究を行ってきたネットいじめとネット依存傾向について主に取り上げ、パーソナリティの側面から、ソーシャルメディアの利用における問題行動について話題提供を行う。ネットいじめについては、ネットいじめを目撃した第3者に着目した研究(e.g., 黒川, 2016)などを紹介する。また、ネット依存傾向については、スマートフォン利用によるインターネット依存傾向について調査した研究(黒川他, 2020)などを紹介する。

引用文献

こども家庭庁 (2024). 令和5年度「青少年のインターネット利用環境実態調査」報告書 こども家庭庁 Retrieved May 22, 2024, from https://www.cfa.go.jp/policies/youth-kankyoku/internet_research/results-etc/r05

黒川 雅幸 (2016). 児童・生徒のネットいじめにおける“witness”の検討 発達研究, 30, 71-82. <https://coder.or.jp/wp/wp-content/uploads/2022/10/HDRVol30.07.pdf>

黒川 雅幸・本庄 勝・三島 浩路 (2020). 高校生・高専生用スマートフォン利用によるインターネット依存傾向尺度の作成 実験社会心理学研究, 60, 37-49. https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjesp/60/1/60_1907/_pdf-char/ja

自主シンポジウム 1

10月6日(日) 13:00~14:40

筑波大学 2A410

テレビから「血液型性格肯定番組」を排除した 20 年の社会実験 —BPO の要望の効果を検証する—

企画者：山岡 重行（聖徳大学心理学科）

司会者：渡邊 芳之（帯広畜産大学）

話題提供者：山岡 重行（聖徳大学心理学科）

指定討論者：渡邊 芳之（帯広畜産大学）

1. 企画趣旨

2009 年の日本パーソナリティ心理学会第 18 回大会において山岡重行を話題提供者、渡邊芳之を司会者、大村政男と浮谷秀一を指定討論者として自主企画「血液型性格判断の差別性と虚妄性」を実施した。

2004 年 2 月 21 日から約 1 年間、約 70 本もの血液型性格関連説に関する TV 番組が放送された。これらの番組では血液型と性格の関連を肯定していた。また、少数派の血液型、特に B 型を否定的に描く番組が多かった。放送倫理・番組向上機構 (BPO) から 2004 年 12 月『『血液型を扱う番組』に対する要望』が出された結果、2005 年 2 月以降こうした血液型性格肯定番組はほとんど放送されなくなった (上村・サトウ, 2006)。

その後しばらく血液型性格関連の大きな話題はなかったが、2007 年 9 月に文芸社より「B 型自分の説明書」が出版され、以後各血液型の説明書が発売された。「血液型自分の説明書」シリーズは累計 540 万部を突破するベストセラーになったという。2008 年 12 月には任天堂のゲーム機 DS 用ソフト「みんなで自分の説明書～B 型, A 型, AB 型, O 型～」まで発売された。この「血液型自分の説明書」シリーズの大ヒットにより「☆型の教科書」「☆型の取扱説明書」「☆型：本当の自分がわかる本」といった二番煎じの血液型性格本が出版され、出版業界における血液型性格ブームが起こった。現時点ではこれが最後の血液型性格ブームである。2012 年には「続 B 型自分の説明書」など続編が出版され、シリーズ累計 620 万部の大ヒットといわれているが、続編はたいして話題にならなかった。

血液型性格判断は、各血液型のイメージを定着させ、様々な問題を生み出してきた。しかし前述の 2004 年 12 月の BPO の要望によりテレビから露骨な血液型性格の肯定情報が発信されなくなった。1970 年代から 2004 年まで約 35 年にわたりマスコミによって発信され日本社会に植え付けられた血液型性格であるが、それを肯定する情報をテレビから排除するという社会実験を 20 年にわたって行っているのである。その社会実験によって血液型性格に関する人々の意識はどのような影響を受けたのだろうか。本シンポジウムでは山岡の調査研究結果をもとにその社会実験の効果について考えてみたい。

引用文献

上村晃弘・サトウタツヤ (2006). 疑似性格理論としての血液型性格関連説の多様性 パーソナリティ研究, 15, 33-47.

2. 話題提供者の要旨

2.1. 「25 年の実証研究から見えてきた血液型性格の正体」

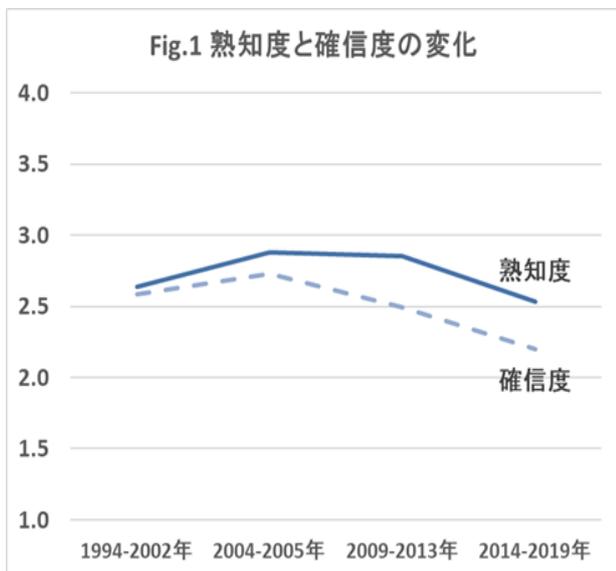
山岡 重行 (聖徳大学心理学科)

山岡は 1999 年から断続的に血液型性格に関する調査を行っている。2019 年までのデータをもとに研究結果を紹介したい。

① 血液型性格の熟知度と確信度

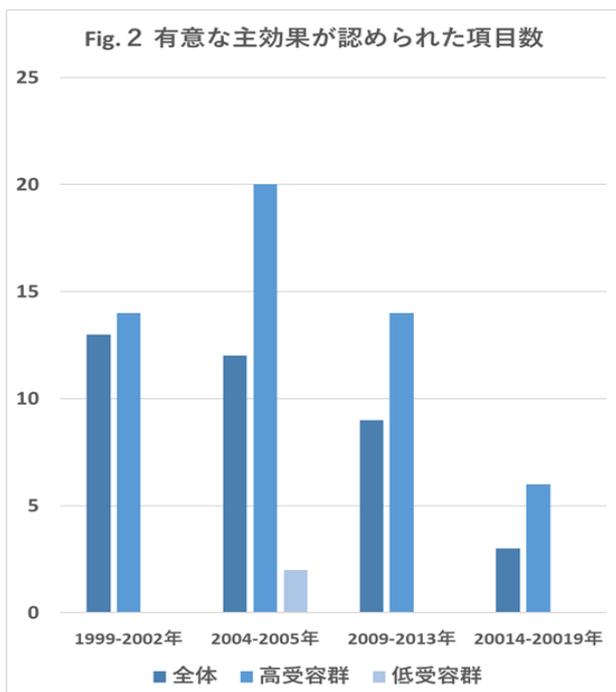
「各血液型の性格の特徴や血液型による相性をどの程度よく知っているか」を、「1: 全く知らない, 2: あまり知らない, 3: 少し知っている, 4: よく知っている」の 4 件法で、また「血液型性格診断をどの程度信じているか」

を、「1:全く信じていない, 2:あまり信じていない, 3:少し信じている, 4:信じている」の4件法でそれぞれ回答を求めた。



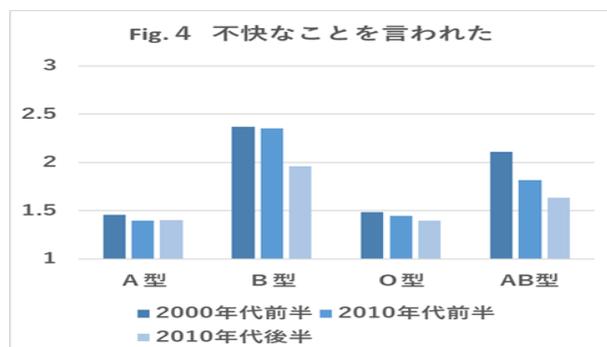
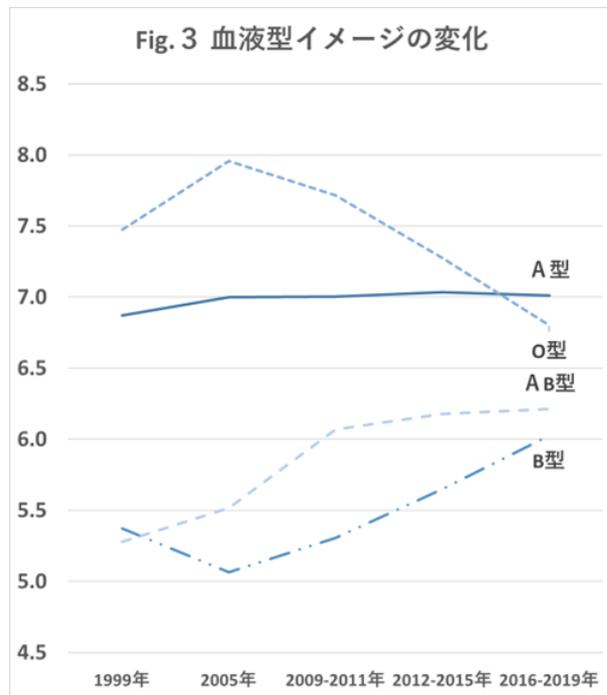
② 血液型性格項目の自己評定

渡辺 (1994) が用いた血液型性格項目を使用した。これは、6冊の血液型性格本のうち3冊以上に共通して特定の血液型の特徴として記述されていた項目である。各血液型につき7項目、合計28項目を血液型性格項目として採用した。回答方法は「1:全く当てはまらない, 2:あまり当てはまらない, 3:どちらともいえない, 4:やや当てはまる, 5:よく当てはまる」の5件法である。



③ 各血液型のイメージと不快体験 F

各血液型のイメージの良さを「とてもイメージが良いが10点, とてもイメージが悪いが0点」の10点満点で点数をつけてもらった。



血液型イメージに関して、いまだB型のイメージが悪いが、改善傾向にある。BPOの要望は血液型差別抑制のために一定の効果があるといえるが、B型は他の血液型よりも血液型性格による不快体験が今でも有意に多い。

これらの結果をもとに、テレビ番組から血液型性格肯定番組を排除した20年の社会実験の効果について、フロアの先生方も含めてともに考えたい。

(やまおかしげゆき・わたなべよしゆき)

引用文献

渡辺 席子 (1994). 血液型ステレオタイプ形成におけるプロトタイプとイグゼンプラの役割 社会心理学研究, 第10巻第2号, 77-86.

山岡 重行 (2024). 血液型性格心理学大全 (仮) 福村出版

自主シンポジウム 2

10月6日(日) 15:00~16:40

筑波大学 2A410

子どもの認知的・社会情動的発達をめぐる遺伝と環境 —双生児研究の挑戦—

企画者：川本 哲也（慶應義塾大学）、敷島 千鶴（帝京大学）

司会者：川本 哲也（慶應義塾大学）

話題提供者：敷島 千鶴（帝京大学）、山口 天音（帝京大学大学院）、吉野 美礼（帝京大学大学院）

指定討論者：高橋 雄介（京都大学）

1. 企画趣旨

行動遺伝学とは、私たちの心理・行動を含む種々の量的形質の個人差が、遺伝要因と環境要因のそれぞれによりどの程度説明されるのかを明らかにする学問である。双生児法は、行動遺伝学的手法のうち最もよく用いられている方法の1つで、一卵性双生児と二卵性双生児の類似性を比較することを通じ、分散として表現される形質の個人差を、相加的遺伝・共有環境・非共有環境要因により説明される部分へと分解する。今日、特定の心理・行動形質に関し、その分散を上述の3要因に分解することにとどまる知見は、もはや新規性はほとんどない。しかし、一見すると環境と見なせるような形質に潜む遺伝要因を明らかにする、複数の心理・行動形質間の関連性を遺伝・環境要因へと分解する、さらには縦断研究デザインのもと、異なる時点においても共通して表現型の分散を説明する遺伝・環境要因を見出すような研究は、今なお、その意義を失っていない。

慶應義塾ふたご行動発達研究センターでは、子ども達の認知的・社会情動的発達のメカニズムを遺伝環境構造の観点から明らかにすべく、長期にわたる双生児縦断研究を進めてきた。特に、当センターが2017年度より実施している「学力と生きる力のふたご家族調査」は、児童・青年期の子どもの認知的・社会情動的発達のメカニズムを、横断的・縦断的な観点から多角的に検討することが可能な双生児縦断研究である。本シンポジウムでは、本調査がこれまでに明らかにしてきた、認知能力の発達、社会情動的スキルと認知能力の関連、養育者による養育行動に潜む遺伝要因に関する知見を紹介する。それらの知見

から、子ども達の認知的・社会情動的発達のメカニズムに関する原因論的観点からの考察と、それを明らかにする双生児研究の将来的な展望について議論したい。

2. 話題提供者の要旨

2.1. 「認知能力の遺伝と環境—3歳から15歳までの双生児縦断テストデータから—」

敷島 千鶴（帝京大学）

本研究の目的は、幼児期から学齢期にかけて、子どもの認知能力がどの程度安定し、また変化しているのかを実測データから明らかにし、その安定と変化をもたらす要因とは何か、行動遺伝学的方法を用いて遺伝と環境のレベルから明らかにすることにある。

対象としたのは、2003~2010年度生まれの同性双生児たちである。幼児期の認知能力の指標は、36か月・42か月・48か月・60か月時に、対面で個別に測定したJapanese Kaufman Assessment Battery for Children(日本版K-ABC)より、認知処理過程尺度と習得度尺度である。学齢期の認知能力の指標は、小学3年生から中学3年生時に、郵送法で自記式質問紙を用いて測定した、算数/数学と国語の学力テスト(山口他,2019)、並びに演繹的推論課題(赤林他,2016)である。

幼児期と、小学生時・中学生時の認知能力の表現型相関は、概ね $r=0.3$ 程度であった。しかし、その相関をもたらしている、時点間の遺伝相関・環境相関の程度は、認知能力の次元と発達の時期により一様ではなかった。

本研究では、幼児期の認知能力のどの要素が、学齢期の学力のどの側面と、いつどのように関連していくのか、精緻に検討を行う。そして、認知能力に寄与する遺伝と家庭

環境とは何を指しているのか、そのメカニズムについても考察していきたい。

引用文献

赤林 英夫・直井 道生・敷島 千鶴 (編著) (2016). 学力・心理・家庭環境の経済分析—全国小中学生の追跡調査から見えてきたもの 有斐閣

山口 一大・敷島 千鶴・星野 崇宏・繁樹 算男・赤林 英夫 (2019). 小学 1 年生から中学 3 年生を対象とした学力テストの垂直尺度化 心理学研究, 90, 408-418.

2.2. 「社会情動的スキルと認知能力の遺伝と環境—小学生と中学生の双生児データから—」

山口 天音 (帝京大学大学院)

本研究の目的は、相互に影響を与え合い発達するとされる子どもの社会情動的スキルと認知能力の関係を、遺伝と環境の視点から検討することである。特に、社会情動的スキルの一つである Grit (やり抜く力) と認知能力である学力の関心に焦点を当てる。

学力と Grit は有意な正の遺伝相関および非共有環境相関により関連することが行動遺伝学研究によって明らかにされている (Martinez et al., 2022)。本研究では、より精緻に検討するために、Grit を興味の一貫性と根気の 2 次元に分け、小学生と中学生それぞれについて分析し、両者の関連のメカニズムを遺伝環境構造から明らかにする。

小学生約 300 組、中学生約 700 組の双生児に対し、学力指標として学力テスト、Grit の指標として Short Grit Scale 日本語版の子ども版 (Takahashi et al., 2021) の回答を求めた。

表現型レベルでは、小中学生を通して、学力と Grit の根気に正の相関が見られたが、遺伝・環境レベルでは、小学生では共有環境・非共有環境要因相関、中学生では遺伝要因相関による関連であることが示された。本研究の結果から、遺伝と環境レベルまで分解すると、認知能力と社会情動的スキルの関連のメカニズムが年齢によって変化することが示唆された。

引用文献

Martinez, K. M., Holden, L. R., Hart, S. A., & Taylor, J. (2022). Examining mindset and grit in concurrent and future reading comprehension: A twin study. *Developmental Psychology*, 58, 2171-2183.

Takahashi, Y., Zheng, A., Yamagata, S., & Ando, J. (2021). Genetic and environmental architecture of conscientiousness in adolescence. *Scientific Reports*, 11, 3205.

2.3. 「母親の養育態度の遺伝と環境—双生児と母親のデータから—」

吉野 美礼 (帝京大学大学院)

本研究の目的は、親の養育態度という「環境」について、実際に親がどう行動し、子どもによってどう引き出され、子どもがどう認知するのかという親子の相互作用を、遺伝と環境の要因レベルから解明することにある。

養育態度の指標には、日本語版 Interpersonal Behaviours Questionnaire (IBQ-J: 肖・外山, 2020) を使用し、中学 1 年生から 20 歳までの双生児約 600 組に対して回答を求めた。双生児の母親に対しても、開発者に尺度変更の許可を得、IBQ-J 親回答版のオリジナル尺度を作成し、双生児 2 名それぞれについて回答を求めた。

子どもの遺伝的影響は、親の統制には見られないが、親の温かさには見られるなど、親の養育態度に寄与する遺伝的影響は、養育次元により異なることが報告されている (Rowe, 1981 など)。これより、欲求支援行動の認知には子どもの遺伝的影響が見られるが、欲求阻害行動の認知には見られないことが予測できる。

本研究では、まず、親の欲求支援・阻害行動について、子どもと親の得点の相関分析を行い、子どもの認知と親の実行動がどの程度一致しているかを検討する。次に、子どもの得点と母親の得点のそれぞれに単変量遺伝分析を行い、両分析結果を比較することにより、子どもが感じる親の欲求支援行動と欲求阻害行動の認知の仕方に子どもの遺伝が入り込んでいるのか、親の行動が子どもの遺伝的な個人差に反応したものであるのかを識別する。

これらの分析を通して、子どもが受け止める親の養育態度には、子ども本人の遺伝と親の行動がどのように関連しているのか、その機序を明らかにしていく。

引用文献

Rowe, D. C. (1981). Environmental and genetic influences on dimensions of perceived parenting: A twin study. *Developmental Psychology*, 17, 203-208.

肖 雨知・外山 美樹 (2020). 日本語版欲求支援・阻害行動尺度 (IBQ-J) の開発 心理学研究, 90, 581-591.

付記

「学力と生きる力のふたご家族調査」は、科学研究費補助金基盤研究(S)16H06323, 若手研究(B)17K13921, 基盤研究(C)20K03342, 23K02900, 依存学推進協議会 2019 年度研究助成の助成を受けた。

司会者:長峯 聖人(江戸川大学)

(○は責任発表者 #は非会員)

- | | | | | |
|----|-----------------|---|------------------------|--|
| 01 | 14:30~
14:55 | 外向性の自己呈示は他の特性も変化させる—「自己呈示の内在化」の再検討— | ○ 上田 臯介

山形 伸二 | 名古屋大学大学院教育発達科学研究科・日本学術振興会
名古屋大学大学院教育発達科学研究科 |
| 02 | 14:55~
15:20 | 仕事場面での制御焦点と他者志向的動機—自己の利得・損失と他者の利得・損失— | ○ 山田 裕生

神長 伸幸 # | ミイダス株式会社 HRサイエンス研究所
ミイダス株式会社 HRサイエンス研究所 |
| 03 | 15:20~
15:45 | 目標への努力を続けるか諦めるか迷った際に行う対処方略の効果検証—ストレス反応, ストレス関連成長を目的変数にして— | ○ 長村 圭吾
外山 美樹 | 筑波大学 人間総合科学学術院
筑波大学 |

休憩 (15:45~15:55)

- | | | | | |
|----|-----------------|--|-----------------------|--------------------------------------|
| 04 | 15:55~
16:20 | 日本語版 Scale of State Dissociation の心理測定的特徴—性別に見た特異項目機能— | ○ 池田 龍也

田辺 肇 # | 兵庫教育大学大学院学校教育研究科
静岡大学大学院人文社会科学研究科 |
| 05 | 16:20~
16:45 | 多元的公正世界信念といじめ目撃時の態度の関連—中学生を対象とした場面想定法— | ○ 水野 君平 | 北海道教育大学旭川校 |
| 06 | 16:45~
17:10 | 「早生まれ」と不適応の関連は学年によって調整されるのか?—3歳から15歳までを対象とした相対年齢効果の検討— | ○ 中井(松尾) 和弥 | 神戸松蔭女子学院大学 |

- | | | | |
|-----|--|---|---|
| 候補1 | スポーツにおける対人暴力被害者の感情制御の様態を探る—ネガティブな反すうの媒介効果— | ○ 豊田 隼
石川 勝彦 #
尾見 康博 | 山梨大学大学院医工農学総合教育部・
日本学術振興会特別研究員 DC2
鳴門教育大学
山梨大学 |
| 候補2 | 感情の不安定性が援助要請に及ぼす影響 | ○ 本間 真凜
小河 妙子 # | 弘前大学大学院保健学研究科
弘前大学大学院保健学研究科 |
| 候補3 | 攻撃性の強い人の感情回復に与える音楽の好みと曲調の影響—内向・外向攻撃性に着目して— | ○ 劉 蔓儀
相馬 敏彦
岩永 誠 # | 広島大学大学院人間社会科学研究所
広島大学大学院人間社会科学研究所
広島大学大学院人間社会科学研究所 |
| 候補4 | 高校生のネガティブなライフイベントの経験と抑うつ傾向・躁傾向との関連—神経症傾向と勤勉性による媒介効果の検討— | ○ 田中 麻未
高橋 雄介 | 帝京大学
京都大学 |
| 候補5 | 知的謙虚さと経済的成功の関連は正か負か | ○ 山形 伸二
高橋 雄介 | 名古屋大学
京都大学 |
| 候補6 | 小中学生における日々の家族関係の軌跡は Big Five とどのように関連するか—1人1台端末を活用した強縦断データに基づく検討— | ○ 澤田 和輝
鈴木 美樹江
高橋 雄介 | 京都大学
愛知教育大学
京都大学 |
| 候補7 | 職場のソーシャルサポートと精神的健康・疲労の回復状況の関連—日本人労働者を対象とした横断調査と追跡調査の比較— | ○ 高田 琢弘
加島 遼平 #
王 薈琳 #
小林 秀行 #
佐々木 毅 #
高橋 正也 # | 労働安全衛生総合研究所
労働安全衛生総合研究所
労働安全衛生総合研究所
高知県立大学
労働安全衛生総合研究所
労働安全衛生総合研究所 |
| 候補8 | わが国における不安感受性の潜在構—Anxiety Sensitivity Index-3 日本語版を用いた Taxometric 分析— | ○ 福井 義一
中谷 智美 | 甲南大学文学部
甲南大学大学院人文科学研究科 |

※ 大会参加者のみなさまへお願い

優秀大会発表賞候補者の発表時間帯にご来場・ご投票いただけますよう、ご協力をお願いいたします。

- P1-1 姿勢とパーソナリティの関連—ビッグ
グファイブによる検討— ○ 鈴木 公啓 東京未来大学
真家 英俊 # 東京未来大学
山口 慎史 東京女子医科大学
中村 美幸 # 順天堂大学
川田 裕次郎 # 順天堂大学
- P1-2 座右の銘が自己肯定感に与える影響 ○ 杉本 眞一 放送大学
- P1-3 自己理解と自己認識欲求が就業者の
職務適応に及ぼす影響 ○ 市川 玲子 NEC ソリューションイノベータ株
式会社
鈴木 美穂 # NEC ソリューションイノベータ株
式会社
秋富 穰 # NEC ソリューションイノベータ株
式会社
- P1-4 理想自己と現実自己の差異と自己注
目が自己受容に及ぼす影響 ○ 山下 滉太郎 金沢工業大学大学院
石川 健介 金沢工業大学
- P1-5 対面・インターネット上の自己開示と
孤独感 ○ 藤江 直輝 金沢工業大学大学院心理科学研究
科臨床心理学専攻
石川 健介 金沢工業大学
- P1-6 青年期の恋愛状況と心理的適応感—
片思い状況を含めた検討— ○ 古谷 かすみ 愛知淑徳大学大学院心理医療科学
研究科
高野 恵代 愛知淑徳大学心理学部
坂田 陽子 # 愛知淑徳大学心理学部
久保 南海子 # 愛知淑徳大学心理学部
- P1-7 感謝特性に関連するパーソナリティ
特性—ダークトライアドに注目して
— ○ 今泉 里香 早稲田大学大学院文学研究科
小塩 真司 早稲田大学文学学術院

- | | | | |
|-------|---|------------------------------|---|
| P1-8 | Dark Triad の他者操作方略とポジティブ側面への積極的注目との関連の検討 | ○ 中荒江 大河
増井 啓太 | 追手門学院大学大学院心理学研究科
追手門学院大学心理学部 |
| P1-9 | 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求と価値観の関連—シュワルツ基本価値モデルの日本語訳を用いた検討— | ○ 小島 弥生 | 北陸大学国際コミュニケーション学部 |
| P1-10 | 大学生における感情制御と対人ストレスの関連—自己愛傾向による比較— | ○ 董 玉娜 | 四国大学生生活科学部 |
| P1-11 | 現代の大学生における PIL テスト適応の検討 | ○ 広野 なるみ
平野 真理
杉山 雅宏 # | 東京家政大学
お茶の水女子大学生生活科学部心理学科
東京家政大学人文学部心理カウンセリング学科 |
| P1-12 | ランチメイト症候群尺度社会人版の作成 | ○ 岡田 努 | 金沢大学人文学系 |
| P1-13 | 本来感の低さは自己有用感と自己受容の関連を阻害するか？ | ○ 能渡 綾菜
能渡 真澄 # | 筑波大学大学院人間総合科学研究科
株式会社ビジネスリサーチラボ |
| P1-14 | 大学生のキャラを介した友人関係が承認欲求に与える影響 | ○ 宮坂 元 | 金沢工業大学大学院 |
| P1-15 | HSP 傾向と自己理解および他者理解との関連 | ○ 佐藤 祐基
楠野 未侑 #
渡辺 舞 | 北星学園大学社会福祉学部
北星学園大学社会福祉学部
豊岡短期大学通信教育部 |
| P1-16 | アスリートと非アスリートの Big Five の比較に関するメタ分析 | ○ 富島 大樹 | 清泉女学院大学人間学部 |
| P1-17 | 大学生における SNS 利用が瘦身理想の内在化と瘦身願望に与える影響 | ○ 関 瑞穂 | 金沢工業大学心理科学研究科 |

- P1-18 わが国におけるアレキシサイミア傾向の潜在構一Gotow Alexithymia Questionnaireを用いたTaxometric分析一 ○ 中谷 智美 甲南大学大学院人文科学研究科
福井 義一 甲南大学文学部
- P1-19 退屈に対する信念尺度の妥当性の検討一大学生を対象として一 ○ 湯 立 長崎大学
- P1-20 泣き方が支援意図に与える影響一泣きの信念に着目して一 ○ 白井 真理子 信州大学人文学部
木村 年晶 # 京都橘大学
- P1-21 特性シャードンフロイデが第三者罰期待を促す動機的メカニズム一不正者への嫌悪と被害者への共感的苦痛に着目して一 ○ 加藤 伸弥 武蔵野大学人間科学研究所
泉 明宏 # 武蔵野大学人間科学部
- P1-22 セルフ・コンパッションとネガティブ感情予測がセルフ・ハンディキャッピング行動に及ぼす影響 ○ 澤村 夏樹 筑波大学大学院人間総合科学研究群
湯川 進太郎 # 白鷗大学教育学部
- P1-23 ライブコーチングによる子育て心理教育プログラムの効果 ○ 門田 昌子 川崎医療福祉大学医療福祉学部
寺崎 正治 川崎医療福祉大学医療福祉学部
武井 祐子 川崎医療福祉大学医療福祉学部
岡野 維新 川崎医療福祉大学医療福祉学部
池内 由子 # 川崎医療福祉大学医療福祉学部
- P1-24 向社会的行動の促進動機・抑制動機について一性格特性と共感性による検討一 ○ 高橋 和花 北星学園大学大学院社会福祉学研究科
西山 薫 北星学園大学
- P1-25 場面想定法におけるイラスト挿入の効果一シャードンフロイデが喚起される場面を指標として一 ○ 稲垣 勉 京都外国語大学共通教育機構
渡邊 ひとみ 高知大学
- P1-26 他者の不幸を親友と喜ぶとき、自己高揚は生じるのか？一経験されたシャードンフロイデの強さに着目して一 ○ 渡邊 ひとみ 高知大学人文社会科学部
稲垣 勉 京都外国語大学

- P1-27 学習時に感じる負担の捉え方の分類と学習へ与える影響—負担の捉え方とマインドセットとの関連から— ○ 真鍋 一生 名古屋大学大学院教育発達科学研究科
中谷 素之 名古屋大学大学院教育発達科学研究科
- P1-28 疑問文型セルフトークの影響の再検討—内発的動機づけとパフォーマンスに及ぼす影響— ○ 間賀田 悠吾 同志社大学心理学部
田中 あゆみ # 同志社大学
- P1-29 日本語版 3 項モデルサイコパシー尺度 (TriPM-J) の開発(3)—大学生を対象とした情動コンピテンスとの関連— ○ 喜入 暁 周南公立大学
田村 紋女 愛媛大学
杉浦 義典 広島大学
- P1-30 楽観・悲観性尺度の短縮版についての提案 ○ 渡辺 将成 中部学院大学大学院人間福祉学研究科
大森 正英 # 中部学院大学
藤岡 孝志 # 中部学院大学
堅田 明義 # 中部学院大学
- P1-31 親密な関係の感情相互依存に対する愛着傾向の調整効果—Dynamic APIMを用いる追試研究— ○ 謝 新宇 広島大学人間社会科学研究科
黄 瑤 # 広島大学人間社会科学研究科
相馬 敏彦 広島大学人間社会科学研究科
古村 健太郎 弘前大学人文社会科学部
金政 祐司 追手門学院大学心理学研究科
- P1-32 日本人学習者における学業的リスクテイキング—失敗観の独自効果に着目して— ○ 赤松 大輔 京都教育大学
ゲルゲル クラウ 一橋大学
ディア #
- P1-33 孤独感が社会的脅威に対する選択的注意に及ぼす影響—孤立場面への注意からの解放の遅延効果の検証— ○ 豊島 彩 島根大学
楠見 孝 # 京都大学
- P1-34 セルフ・コンパッションが高齢期の発達課題に及ぼす影響—ストレスフル・ライフイベントのとらえ方から— ○ 天谷 祐子 名古屋市立大学大学院人間文化研究科

- P1-35 大学生の自閉スペクトラム症特性と抑うつとの関連—親子の自閉スペクトラム症特性と親からの情緒的サポートに着目した検討—
- 坂田 侑奈 駒澤大学
菅原 ますみ 白百合女子大学
田中 麻未 帝京大学
齊藤 彩 お茶の水女子大学
- P1-36 専門学校生の注意欠如・多動傾向と学校適応感との関連—レジリエンスに着目して—
- 齊藤 彩 お茶の水女子大学基幹研究院
佐藤 みのり お茶の水女子大学教学 IR・教育開発・学修支援センター

- P2-1 MBTI の P (知覚) 型と抑うつ・不安との関係について—最近の論文データ分析による考察— ○ 塚本 徹雄 新潟医療福祉大学医療情報管理学科
- P2-2 抑うつ症状における援助要請の勧め方—症状認知と有効性の認知を要因として— ○ 永井 智 立正大学心理学部
- P2-3 自分のレジリエンスを認識することがもたらす心理的効果—レジリエンス・セルフワーク web プログラムの効果検討 (1) — ○ 平野 真理 柳田 温子 お茶の水女子大学 お茶の水女子大学
- P2-4 予防的心理プログラムの継続および介入効果に影響する要因—レジリエンス・セルフワーク web プログラムの効果検討 (2) — ○ 柳田 温子 平野 真理 お茶の水女子大学 お茶の水女子大学
- P2-5 大学生の ADHD による困り感と自己対処方略 (1) —自己対処方略に関する探索的研究— ○ 湯川 彰浩 松田 笙 # 井上 由美子 水野 雅之 # 筑波大学大学院人間総合科学学術院 筑波大学心理学類 筑波大学大学院人間総合科学学術院 筑波大学人間系
- P2-6 大学生の ADHD による困り感と自己対処方略 (2) —大学適応との関連— ○ 井上 由美子 松田 笙 # 湯川 彰浩 水野 雅之 # 筑波大学大学院人間総合科学学術院 筑波大学人間学群心理学類 筑波大学大学院人間総合科学学術院 筑波大学大学院人間総合科学学術院
- P2-7 アレキシサイミアとアサーティブネスの関係—パーソナリティ特性の影響を統制して— ○ 小鹿 真嗣 東海学院大学大学院人間関係学研科

P2-8	親子の報酬と罰への反応傾向と心理的適応の関連—母子ペアデータを用いた検討—	○ 清水 陽香	西九州大学短期大学部
P2-9	不眠と悪夢から自殺のリスクを予測する—縦断調査による検討—	○ 松田 英子	東洋大学社会学部
P2-10	The Passive Aggression Scale 日本語版の作成	○ 重藤 彩伽 住岡 恭子 #	岡山大学 岡山大学
P2-11	教職経験者が心理臨床を学ぶことで働く際に生じる影響	○ 西村 佐彩子	京都教育大学教育学部
P2-12	不適応的パーソナリティ特性と孤独感との関連—短期縦断調査による検討—	○ 櫛引 夏歩 菅原 大地 # 柳 百合子 # 相羽 美幸 # 白鳥 裕貴 # 川上 直秋 # 太刀川 弘和 #	弘前大学 筑波大学 筑波大学, 国立精神・神経医療研究センター 東洋学園大学 筑波大学 筑波大学 筑波大学
P2-13	曖昧さへの態度が社会適応に与える影響におけるメンタライジング能力の調整効果	○ 榎木 宏之 甲田 宗良 #	広島国際大学 徳島大学
P2-14	ソーシャルスキルと社交不安が大学生のひきこもり親和性に与える影響	○ 屋田 拓臣 谷 伊織	愛知学院大学院心身科学研究科 愛知学院大学
P2-15	解釈レベルが就寝時間先延ばしに与える効果	○ 河辺 優菜 神原 広平 #	筑波大学人間総合科学学術院 同志社大学心理学部
P2-16	予期ノスタルジアを測定する—多様な時期を対象として—	○ 長峯 聖人 千島 雄太 #	江戸川大学 筑波大学

- | | | | |
|------|--|--|--|
| P3-1 | 家計管理行動尺度作成の試み | ○ 渡辺 伸子 | 東北公益文科大学 |
| P3-2 | 特殊詐欺に対する当事者意識尺度の開発 | ○ 嘉瀬 貴祥
三上 清太郎 # | 人間環境大学総合心理学部
SOS47 事務局 |
| P3-3 | 大学生のチームワーク能力と愛着スタイルの関連 | ○ 太幡 直也 | 愛知学院大学総合政策学部 |
| P3-4 | FemTech アプリ利用におけるプライバシーへの不安の整理 | ○ 佐藤 広英
太幡 直也
金森 祥子 # | 信州大学/情報通信研究機構
愛知学院大学/情報通信研究機構
情報通信研究機構 |
| P3-5 | 刑事司法参加の時系列分析 | ○ 向井 智哉
綿村 英一郎 # | 福山大学
大阪大学 |
| P3-6 | 就活ハラスメントと企業イメージの関連—大学生を対象とした検討— | ○ 辻 鼓二郎
向井 智哉
木村 節子 #
新谷 理沙 #
廣川 進 # | 福山大学人間文化学部心理学科
福山大学人間文化学部心理学科
クオレ・シー・キューブ
クオレ・シー・キューブ
法政大学キャリアデザイン学部 |
| P3-7 | 食生活における簡便さの重視は日々の充実に関連するか—年齢との相互作用の検討— | ○ 岡本 茉莉
小塩 真司 | 早稲田大学文学研究科
早稲田大学文学学術院 |
| P3-8 | キャリア達成を予測するネットワーキング能力に関する縦断調査 (2) —加藤 (2021) の再現可能性とグループパフォーマンスに関する検討— | ○ 加藤 仁 | 北陸学院大学社会学部 |
| P3-9 | 日本人大学生における様々な死後の世界観と様々な幸福感の関連性 | ○ 向居 暁
中本 朋花 # | 県立広島大学地域創生学部
戸田建設 |

P3-10	偏見の抑制要因としての社会的望ましさと嘘に関する検討	○ 谷口 あや 大工 泰裕 #	三重大学教育学部 大阪大学
P3-11	性的指向についての質的検討—自分自身を含む「ほぼ異性愛者」の捉え方に至る過程について—	○ 富田 彩乃 外山 美樹	無所属 筑波大学
P3-12	大学生の認知症高齢者への態度に影響する要因	○ 岩本 茉白 大矢 寿美子 #	金沢工業大学大学院臨床心理学専攻 金沢工業大学心理科学研究所
P3-13	Highly Sensitive Person の援助要請意図とその促進要因の検討—集団への貢献感と集団の互恵性規範への着目—	○ 松崎 美奈子 井奥 智大 綿村 英一郎 #	大阪大学人間科学研究科 大阪大学国際教育交流センター 大阪大学人間科学研究科
P3-14	心理学が平和のためにできること (3) —性別および年齢と平和への態度との関連—	○ 友田 貴子	淑徳大学人文学部
P3-15	子どものいない夫婦の特性—全国社会調査 (JGSS) の分析と当事者への聞き取りから—	○ 山本 秀彦	放送大学
P3-16	ネパールと日本の大学生のパーソナリティ特性の比較	○ Nishaat Aneesah	東日本国際大学グローバル人財育成研究所
P3-17	環境感受性とポジティブ／ネガティブ感情, Big Five パーソナリティ特性の関連—日米大学生のデータを用いた検討—	○ 矢野 康介 飯村 周平 #	国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター 創価大学教育学部
P3-18	心理的リアクタンス特性の再検討 (2) —Hong 尺度に着目して—	○ 木川 智美	名古屋産業大学現代ビジネス学部
P3-19	2 種類の自己愛傾向の BIS/BAS による弁別的な関連—SNS に作品を投稿する個人を対象として—	○ 有海 春輝 高橋 雄介	京都大学大学院教育学研究科 京都大学大学院教育学研究科

P3-20	アタッチメントネットワークのパターン	○	古村 健太郎 金政 祐司 宮川 裕基 #	弘前大学 追手門学院大学 追手門学院大学
P3-21	イデオロギー的態度の個人差の対人円環上の位置づけ	○	三枝 高大 下司 忠大 吉野 伸哉	福島県立医科大学 立正大学 公益財団法人医療科学研究所
P3-22	ストレスに関する個人の信念についてのシステムティックレビュー	○	劉 艶艶	お茶の水女子大学
P3-23	大学生のコロナ感染予防行動の変化と個人特性の関連—4 波コーホート調査の結果から—	○	井川 純一 五百竹 亮丞 #	東北学院大学 広島文教大学
P3-24	ダークなパーソナリティは顔のどの部分に現れるのか	○	増井 啓太	追手門学院大学心理学部
P3-25	鮮明性測定尺度回答時に生じる聴覚のイメージ体験の検討	○	福井 晴那	立正大学
P3-26	メタバースによるオンライン不登校支援への通所希望に関連する要因	○	三和 秀平	信州大学教育学部
P3-27	資源コントロール戦略としての教示行動	○	川本 哲也 下司 忠大 唐 音啓 安藤 寿康	慶應義塾大学文学部 立正大学 共愛学園前橋国際大学 慶應義塾大学
P3-28	教示の啓蒙欲求とパーソナリティとの遺伝的関係—Big Five と TCI による双生児研究—	○	安藤 寿康 川本 哲也	慶應義塾大学 慶應義塾大学
P3-29	いじめ被害の長期的影響と精神的健康, ストレス対処方略の関連—青年期における心的外傷後成長とレジリエンスの交互作用—	○	長田 真人	弘前大学大学院医学研究科

- P3-30 Big Five と学業成績の関連—GPA の変動に基づくクラスタリングに着目して— ○ 松木 祐馬 中部大学
山内 星子 # 中部大学
田中 秀紀 # 中部大学
堀 匡 # 中部大学
- P3-31 防犯ボランティアを対象とした防犯教育の実践と効果検証—防犯アプリを活用した地域の防犯活動の活性化に関する研究— ○ 大久保 智生 香川大学教育学部
鈴木 修斗 # 北海道大学大学院教育学院
- P3-32 学校教員の同僚性認知と専門性向上意識との関係—同僚の専門性向上意識と職場の専門性認知を考慮に入れて— ○ 磯和 壮太郎 名古屋芸術大学
今井田 貴裕 # 人間環境大学
- P3-33 静的な活動について体験をどのように捉えるか—学外授業における「きく」体験に対する ZICE の応用可能性— ○ 後藤 龍太 岩見沢キャンパス心理学研究会
五十嵐 麻希 岩見沢キャンパス心理学研究会
山元 隆子 岩見沢キャンパス心理学研究会
山下 温子 岩見沢キャンパス心理学研究会
渡邊 智絵 岩見沢キャンパス心理学研究会
平野 直己 岩見沢キャンパス心理学研究会
- P3-34 「かわいい」の本質—「かわいい」の社会・文化的意味と「性的過激度」について— ○ 相原 征代 北陸大学国際コミュニケーション学部
後藤 和史 北陸大学国際コミュニケーション学部
- P3-35 自己評定における男女差の大きい特性語の検討—ニュアンスレベルの分析— ○ 萩原 千晶 早稲田大学
橋本 泰央 帝京短期大学
下司 忠大 立正大学
三枝 高大 福島県立医科大学
吉野 伸哉 公益財団法人医療科学研究所
小塩 真司 早稲田大学
- P3-36 感情表現の柔軟性尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 ○ 臼倉 瞳 東北学院大学人間科学部

- | | | | |
|------|--|---------------------------------------|--|
| P4-1 | Big Five 尺度における開放性と自尊感情の関連をどのように考えるか | ○ 吉野 伸哉
小塩 真司 | 公益財団法人医療科学研究所
早稲田大学 |
| P4-2 | 児童期用セルフ・コンパッション尺度の作成と信頼性, 妥当性の検討 | ○ 小松 陽香
矢野 康介
遠藤 伸太郎
大石 和男 # | 立教大学スポーツウエルネス学部
国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター
千葉工業大学先進工学部教育センター
立教大学 |
| P4-3 | パーソナリティの認知過程(13)一形態素構造解析を用いた評定者の分類 | ○ 岩熊 史朗 | 駿河台大学心理学部 |
| P4-4 | 日本語版洞察志向性尺度 (Insight Orientation Scale) の作成 | ○ 柴田 康順 | 大正大学 |
| P4-5 | 文化的世界観尺度日本語版の検討 | ○ 武田 美亜
高木 彩 #
鳥山 理恵 # | 青山学院大学
横浜国立大学
個人事業主 |
| P4-6 | 顕在・潜在自尊心と自己愛の関連—Rosenberg の自尊心尺度・自尊心 IAT・ネームレター課題・名前の好み— | ○ 中井 彩香
沼崎 誠 | 東京都立大学人文科学研究科
東京都立大学人文科学研究科 |
| P4-7 | 本邦における日常生活下の希死念慮を測定するパイロットスタディ | ○ 坂田 敦
柳田 綾香 #
熊野 宏昭 # | 早稲田大学人間科学研究科
早稲田大学人間科学研究科
早稲田大学人間科学学術院 |
| P4-8 | 子どものパーソナリティ構造—ICID の探索的因子分析研究のレビュー— | ○ 橋本 泰央
小塩 真司 | 帝京短期大学
早稲田大学 |

P4-9	同一性の問題が過剰適応に与える影響—ボーダーライン・自己愛性・演技性パーソナリティ症傾向に注目して—	○ 坂本 夏歩 望月 聡 柴田 康順	法政大学大学院人間社会研究科 法政大学現代福祉学部 大正大学
P4-10	大学生における過去自己不連続性に対する理由づけについての検討—物語的観点と本質主義的観点に着目して—	○ 浅山 慧 外山 美樹	筑波大学 筑波大学
P4-11	大学生の結婚観および子育て観について—アイデンティティと親密性に着目して—	○ 奥山 ほのか 柴田 康順	大正大学人間学研究科 大正大学
P4-12	第三者による好意度推定の正確性の検証—Liking Gap のシグナル無視説に基づいた検討—	○ 志澤 翔太郎 川上 直秋 #	筑波大学大学院心理学学位プログラム 筑波大学人間系
P4-13	学生の自己開示場面における被開示欲求理由の様相	○ 青木 渉	和光大学大学院 社会文化総合研究科
P4-14	恋人に対する再確認傾向は交際期間で変化するのか—作成した恋愛関係における再確認傾向尺度を使用して—	○ 水戸 有希	法政大学人文科学研究科
P4-15	告白の成否/諾否と Dark Triad との関連	○ 高坂 康雅	和光大学現代人間学部
P4-16	恋人への依存パターンと架空の嫉妬場面における感情との関連	○ 山下 倫実	十文字学園女子大学
P4-17	大学生の援助要請スタイルと問題に対する深刻度の評価が援助要請行動に及ぼす影響—媒介モデルの検討—	○ 高野 ひかり 平野 真理	お茶の水女子大学 お茶の水女子大学
P4-18	「蛙化現象」体験に影響する諸要因に関する研究—新たな蛙化現象との体験後の感覚についての比較—	○ 高橋 誠	神奈川大学人間科学部

P4-19	記憶のポジティブティ・バイアスの 探索的検討	○ 工藤 恵理子 森 津太子 大江 朋子 #	東京女子大学現代教養学部 放送大学教養学部 帝京大学文学部
P4-20	自尊感情の4形態と孤独感の関連— 特性自尊感情, 随伴性自尊感情, 本来 感, 優越感に注目して—	○ 富井 繭 小塩 真司	早稲田大学文学学術院 早稲田大学文学学術院
P4-21	青年期の自己多元性と他者評価に対 する不安の関連について	○ 千葉 あかり 吉田 加代子 #	立正大学大学院心理学研究科 立正大学
P4-22	サイコパシーなヤンキーは短期戦略 恋愛傾向	○ 山岡 重行	聖徳大学心理学科
P4-23	ダークトライアドと人生満足度の関 連について—認知能力を調整変数と した検討—	○ 澁谷 奏平 岡本 茉莉 小塩 真司	早稲田大学文学研究科 早稲田大学文学研究科 早稲田大学文学学術院
P4-24	ファン・オタク・推しの活動の違いに 関する検討—各活動のイメージや実 際の活動による比較—	○ 市村 美帆	和洋女子大学人文学部
P4-25	女性はどんな連続殺人を行うのか— 女性による連続殺人事件の特徴と類 型化—	○ 岸川 礼依	法政大学大学院人文科学研究科心 理学専攻
P4-26	自己愛傾向者に対するコンパッショ ン筆記介入の効果検討—社会的拒絶 への反応に着目して—	○ 小林 茉那 瀬戸 正弘	神奈川大学大学院人間科学研究科 神奈川大学人間科学部
P4-27	ソーシャル・キャピタルと主観的 Well-being の関連—男女および世代 別の分析—	○ 澤田 奈々実 小塩 真司	早稲田大学文学研究科 早稲田大学文学学術院
P4-28	代替的な下位目標の追求を促すに は?—「目標の階層性」に着目して—	○ 外山 美樹 長村 圭吾	筑波大学 筑波大学

P4-29	社会的達成目標と感情的、行動的エンゲージメントとの関連—メタ分析による検討—	○ 海沼 亮 外山 美樹	松本大学教育学部 筑波大学人間系
P4-30	レース競争中の競争段階の認知と動機づけ変化についての検討	○ 清水 登大 外山 美樹	筑波大学 筑波大学
P4-31	学業における自己価値の随伴性と動機づけ調整方略が学業的満足遅延に及ぼす影響プロセスの検討	○ 金子 功一	植草学園大学発達教育学部
P4-32	進捗状況の把握方法に関する先延ばしタイプ別の特徴	○ 黒住 嶺 外山 美樹	株式会社ビジネスリサーチラボ 筑波大学
P4-33	認知バイアス・アセスメント尺度 38 (CBA-38) の作成(1)—因子構造および信頼性の検討—	○ 高比良 美詠子 森 津太子 池田 まさみ # 宮本 康司 #	立正大学 放送大学 十文字学園女子大学 東京家政大学
P4-34	認知バイアス・アセスメント尺度 38 (CBA-38) の作成(2)—認知バイアスと Well-being の関係—	○ 森 津太子 高比良 美詠子 池田 まさみ # 宮本 康司 #	放送大学教養学部 立正大学 十文字学園女子大学 東京家政大学
P4-35	日本語版 Salzburg Emotional Eating Scale (SEES-J) ver.2 作成の試み	○ 合澤 典子 王 燕園 # 大森 美香 #	お茶の水女子大学 お茶の水女子大学大学院 お茶の水女子大学, 東北大学
P4-36	競技者の時間的焦点と競技ストレスサーが人生満足度に与える影響	○ 鄧 思昕 陶山 智 小塩 真司 藤田 主一	早稲田大学文学学術院 日本体育大学 早稲田大学文学学術院 日本体育大学

北大路書房

〒603-8303 京都市北区紫野十二坊町12-8

☎ 075-431-0361 FAX 075-431-9393

https://www.kitaohji.com(価格税込)

パーソナリティのHファクター

—自己中心的で、欺瞞的で、食欲な人たち— K. リー, M. C. アシュトン著 小塩真司監訳 四六・208頁・定価2640円 自分を利するために計算高く他人を操る、特別な地位や権利を得るに値すると自惚れている…… Hファクターの低い人々。パーソナリティのHEXACOモデルを提案した心理学者たちが、彼らに特徴的な性格傾向や行動様式を解説する。

ドムヤンの学習と行動の原理^{〔原著第7版〕}

M. ドムヤン著 漆原宏次, 坂野雄二監訳 B5上製・424頁・定価7920円 学習心理学の泰斗・ドムヤンによる米国で評判のテキスト、待望の邦訳。行動の誘発、強化、制御、消去、変容に関わる学習の原理、およびその広範な活用について、神経科学の裏づけを加えつつ新たな研究知見を紹介。

〈よそおい〉の心理学

—サバイブ技法としての身体装飾— 荒川 歩, 鈴木公啓, 木戸彩恵編著 A5・280頁・定価3740円 なぜ、私たちは今日も〈よそおい〉続けるのか？ 普段の役割を降りるツール、自他の関係調整ツール、ジェンダーワークといった心理的社会的機能の観点から、衣服、化粧、ピアッシングなどの身体装飾の行為を考察。

P-Fスタディ アセスメント要領^{〔第2版〕}

秦 一士著 A5・232頁・定価3190円 成人用第Ⅲ版(2020年)をふまえて全面改訂。「欲求不満状況」に対する「反応傾向」からパーソナリティを理解するP-Fスタディ。実施からスコアリング、整理、解釈まで、P-Fスタディ使用上、生じる種々の疑問に答える。検査の背景にある創始者ローゼンツァイクの研究・理論についても詳しく解説。

非認知能力

—概念・測定と教育の可能性— 小塩真司編著 A5・320頁・定価2860円 「人間力」「やりぬく力」など漠然とした言葉に拠らず、心理学の知見から明快に論じる。誠実性、グリット、好奇心、自己制御、楽観性、レジリエンス、マインドフルネスなど関連する15の心理特性を取りあげ、教育や保育の現場でそれらを育む可能性を展望する。

感情制御ハンドブック

—基礎から応用そして実践へ— 有光興記監修 飯田沙依亜, 榎原良太, 手塚洋介編著 A5上製・432頁・定価6160円 本邦で展開されてきた多彩な感情制御研究を一望できる書。基礎理論に始まり、社会・人格・認知・発達・臨床・教育、さらには経済・司法・労働までの各分野における最新知見を8部31章21トピックで紹介。

パーソナル・コンストラクトの心理学^{〔第1巻〕}

—理論とパーソナリティ— G. A. ケリー著 辻平治郎訳 A5上製・500頁・定価7480円 認知療法、論理療法、認知行動療法のほか、パーソナリティ心理学、アドラー派心理学、人間性心理学、ナラティブ心理学などに強い影響を与えたケリー。哲学的・科学的に深遠な基盤に支えられた幅広いパースペクティブが展開される彼の理論を初邦訳。

攻撃行動とP-Fスタディ

S. ローゼンツァイク著 秦 一士訳 A5・168頁・定価3080円 1945年に出版された、有力な投影法であるP-Fスタディは、研究の手段や臨床査定のテストとして広く用いられている。出版後の約40年間の研究を、総合的批判的に報告。世界各国の関連研究を整理、論評した研究者、臨床家、学生の必読書。

心理学って面白そう！
どんな仕事で活かされている？

シリーズ **心理学と仕事** (全20巻) **完結!** シリーズ 監修 太田信夫

●A5判・148～232頁・定価2200～2530円

- | | | | | |
|-------------|------------|------------|-------------|----------------|
| 1 感覚・知覚心理学 | 2 神経・生理心理学 | 3 認知心理学 | 4 学習心理学 | 5 発達心理学 |
| 6 高齢者心理学 | 7 教育・学校心理学 | 8 臨床心理学 | 9 知能・性格心理学 | 10 社会心理学 |
| 11 産業・組織心理学 | 12 健康心理学 | 13 スポーツ心理学 | 14 福祉心理学 | 15 障害者心理学 |
| 16 司法・犯罪心理学 | 17 環境心理学 | 18 交通心理学 | 19 音響・音楽心理学 | 20 ICT・情報行動心理学 |

血液型性格心理学大全

科学的証拠に基づく再評価

山岡重行 編著

サトウタツヤ、渡邊芳之、藤田主一 著

Now Printing
9月刊行予定

■A 5判/上製/360頁 ◎定価4,400円

血液型と性格の関連を歴史的・科学的に再検討し、その無関連性を証明する。研究者必須の資料論文も収録。

「心の理論」の発達 空間的視点取得から 社会的視点取得

そのプロセスと臨床的視点

小沢日美子 著

■A 5判/並製/172頁 ◎定価2,640円

他者理解の認知発達を空間的視点取得と社会的視点取得の側面から捉え、その発達過程に生じる臨床的課題に言及。

からだがかたどる発達

人・環境・時間のクロスモダリティ

根ヶ山光一、外山紀子 編著

■A 5判/並製/464頁 ◎定価4,400円

他者と関わる基盤となるからだの発達を通して、こころや物理的・社会的環境との関わりを多面的に考察する。

私たちはなぜスマホを手放せないのか

「気が散る」仕組みの心理学・神経科学

アダム・ガザレイ、
ラリー・D・ローゼン 著

河西哲子 監訳

成田啓行 訳

■A 5判/並製/368頁 ◎定価3,850円

最新の心理学と神経科学の研究成果から、スマホやSNSにハマる仕組みとその影響を和らげる処方箋を紹介。

自閉症は英語がお好き!?

自閉スペクトラム症のことばと

社会とメディアの進化

松本敏治 著

Now Printing
8月刊行予定

■四六判/並製/216頁 ◎定価1,980円

メディアからの言語習得はありえないという批判がある。新たな海外の事例やこれまでの調査から融合をはかる。集大成の第3弾!

オタク・スペクトラム

オタクの心理学的研究

山崎尚彦 著

Now Printing
8月刊行予定

■A 5判/並製/232頁 ◎定価3,960円

定量的データと膨大なコンテンツ紹介でオタク文化を網羅的に分析する。心理臨床支援にも役立つオタク論。

教育相談の展望と ロール・プレイングの体系

見守る姿勢・つながる対話・
つなげる心理劇のエッセンス

安藤嘉奈子 著

■A 5判/上製/268頁 ◎定価2,860円

教育相談とロール・プレイングを含む心理劇について、教職課程における実践と研究を促進するための基礎を提示。

児童学とは何か

児童学の方法論・対象・方法をめぐる

ヴィゴツキーの四つの論文を読む

レフ・セミョーノヴィチ・ヴィゴツキー 著

中村和夫 編・訳

■A 5判/並製/172頁 ◎定価2,750円

新たに選出・新訳したヴィゴツキーの論文と講義から、児童学に対する彼の理論的営為の一端を明らかにする。

アイデンティティ研究のための 伝記分析

生涯発達の質的心理学

大野 久 編著

三好昭子、茂垣まどか、赤木真弓 著

■A 5判/上製/486頁 ◎定価8,800円

伝記分析を用いた研究論文の成果と方法論を検討したうえで、その理論・分析の手順・教育法等を包括的に紹介。

自閉 もうひとつの見方

これが私だと
思えるように

バリー・M・プリザント、

トム・フィールズ-マイヤー 著

長崎 勤 監訳

吉田仰希、深澤雄紀、香野 毅、

長澤真史、遠山愛子、有吉未佳 訳

■A 5判/並製/412頁 ◎定価3,630円

自閉症者支援の第一人者による名著の増補改訂版。変わりゆく自閉とアイデンティティの考え方を反映させた。



福村出版

〒104-0045 東京都中央区築地4-12-2

TEL 03-6278-8508 FAX 03-6278-8323

◎定価は税込み価格です。

<https://www.fukumura.co.jp>

心理学を遊撃する

再現性問題は
恥だが役に立つ



山田祐樹 著

A5判並製240頁／定価: 2600円

日本の部活

(BUKATSU)

文化と心理・行動を読み解く



尾見康博 著

四六判並製160頁／定価: 1700円

こころのやまいのとらえかた



佐々木 淳著

四六判並製264頁／定価: 2400円

文化心理学〔改訂版〕

理論・各論・方法論



木戸彩恵・サトウタツヤ 編

A5判並製344頁／定価: 2800円

学びを愉しく

〒157-0062

東京都世田谷区南烏山 5 丁目20-9
ハウス・アム・バンホフ 203

株式会社 **ちとせプレス**

Webサイト: <http://chitosepress.com>

E-mail: info@chitosepress.com

Tel: 03-4285-0214 / Fax: 03-4243-3725



有斐閣

出版案内

〒101-0051
東京都千代田区神田神保町2-17

<https://www.yuhikaku.co.jp/>

表示価格は税込

話題の新テキストシリーズ y-knot (ワイノット) 各四六判

感情心理学・入門

改訂版

大平英樹 編

近刊

有斐閣アルマ四六判 予定価2310円

感情心理学の決定版テキスト、待望の改訂版！ 内受容感覚、心理構成主義、遺伝等々、ここ数十年の理論の新展開を反映しアップデート。(2024年10月刊行予定)

社会心理学

社会を動かすもの・変える力

杉浦淳吉・尾崎由佳・村山 綾 著

近刊

予定価2310円
(2024年11月刊行予定)

社会に溢れる課題をよみとく社会心理学の思考法が身につくテキスト。日常の疑問や傷つき、その違和感をとっかかりに学んでみよう！

*「y-knot」特設サイトを公開中！ 詳細はこちら↓

これからの障害心理学

（わたしと（社会）を問う

中島由宇・沖潮満里子・広津侑実子 編

私の視点、社会の視点から、問い、学べるテキスト。On/Off等のツールやWebサポート（一般向け／先生向け）も充実。
〔公認心理師カリキュラム対応〕

定価2200円

心理学スタディメイト

「心」の新しい出会いのために

廣中直行 著

定価2530円

測定法から老年心理まで、心の学問の世界を探検しましょう。

職場がうまくいかなないときの心理学100

チームリーダーにおけるマネジメント・ガイド

芦高勇氣・安藤史江・伊東昌子・渡辺めぐみ 著

職場の悩み事に心理学からの処方箋。
定価2860円

英語で学ぶ社会心理学

大坪庸介

アダム・スミス 著

有斐閣ブックス A5判
定価2640円

社会心理学の基礎理論が英語で学べる画期的テキスト。



アメリカ発 本格的心理療法の動画教材



psychotherapy.net_JP

Series
01

一歩ずつ学ぶ 動機付け面接

7時間 58分 | ¥33,000 (税込) | 4本シリーズ | レンタル期間 1年間

Series
02

一歩ずつ学ぶ 感情焦点化療法 (EFT) ～カップル支援のための実践ガイド～

11時間 7分 | ¥39,600 (税込) | 4本シリーズ | レンタル期間 1年間

Series
03

子どもの心理療法

① ゲシュタルト療法を用いたプレイセラピー

1時間 47分 | ¥3,300 (税込) | 単品購入可能 | レンタル期間 3ヶ月

② 対象関係論を活用したプレイセラピー

1時間 51分 | ¥3,300 (税込) | 単品購入可能 | レンタル期間 3ヶ月



<https://www.nsgk.co.jp/psychotherapy>



お問合せ先

U 株式会社
日本・精神技術研究所

東京都千代田区九段南 2-3-26 井関ビル 2 階
<https://www.nsgk.co.jp> kouza@nsgk.co.jp

日本パーソナリティ心理学会第33回大会

協賛企業・団体ご芳名

【大会開催助成】

(一社) つくば観光コンベンション協会

つくば市

【広告・書籍販売・協賛金】

福村出版株式会社

【広告・協賛金】

株式会社日本・精神技術研究所

【広告・書籍販売】

株式会社北大路書房

【広告】

株式会社ちとせプレス

株式会社有斐閣

株式会社テキスト

【書籍販売／展示】

株式会社誠信書房

アイブリッジ株式会社

本大会を開催するにあたり、上記の企業・団体により多大なご支援・ご協力を賜りました。
ここにそのご芳名を記して、心から感謝の意を表します。

2024年7月
第33回大会準備委員会委員長
外山 美樹

日本パーソナリティ心理学会第33回大会

準備委員会

【委員長】

外山 美樹（筑波大学）

【事務局長】

長峯 聖人（江戸川大学）

【事務局】

湯 立（長崎大学）

【企画委員】

三和 秀平（信州大学），海沼 亮（松本大学）

【実行委員】

清水 登大，浅山 慧，長村 圭吾，松本 篤（筑波大学大学院）

尾崎 幸平，河辺 優菜，高橋 弘文，大澤 かりん（筑波大学大学院）

伊藤 康一郎，矢嶋 志行（筑波大学）

市川 玲子（NECソリューションイノベータ株式会社），富田 彩乃

【連絡先】

〒305-8572 茨城県つくば市天王台 1-1-1 筑波大学人間系総合事務室

日本パーソナリティ心理学会第33回大会事務局

E-mail: 33jspp2024@gmail.com

大会ホームページ: <https://www.jspp33.jp/>